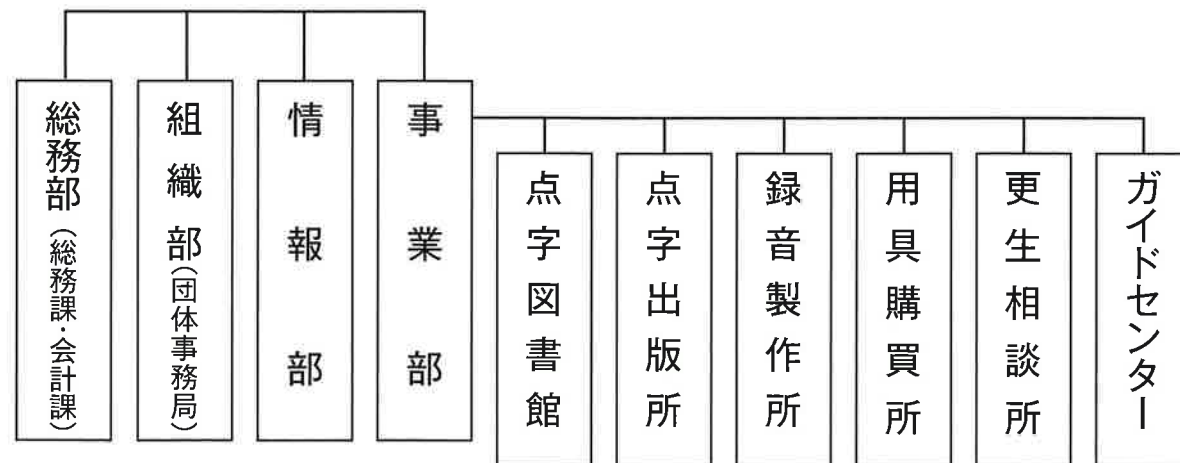
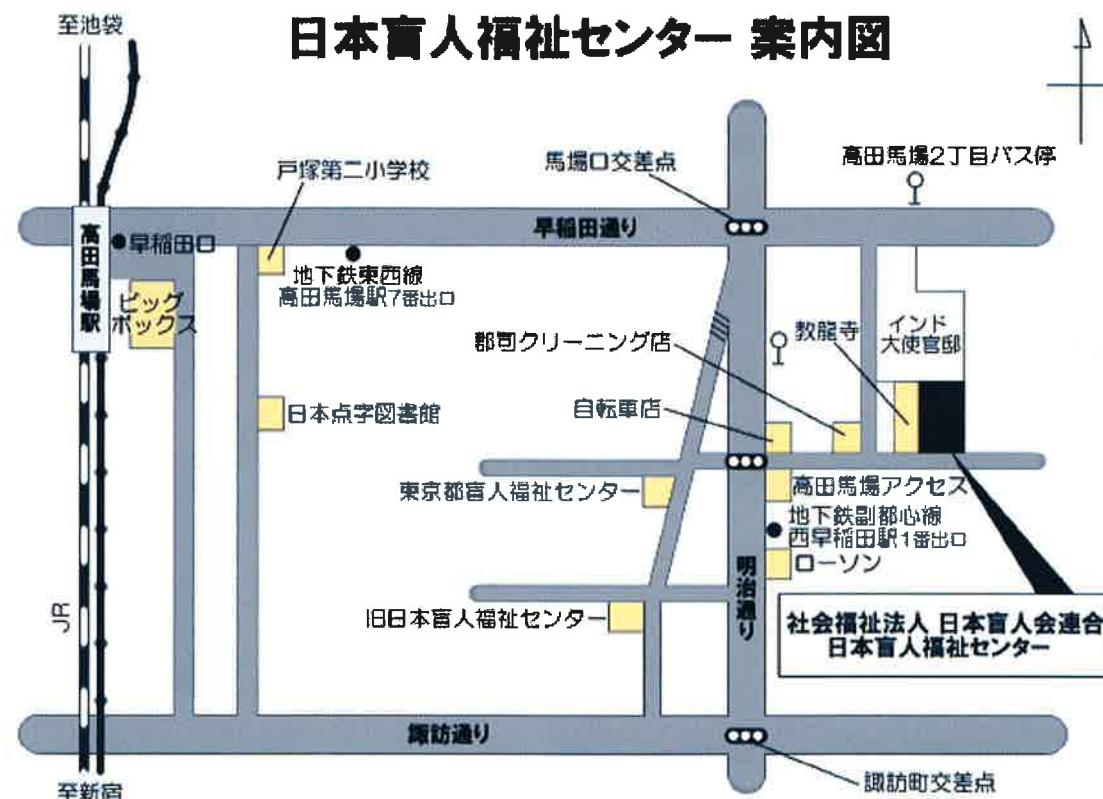


組 織 図



日本盲人福祉センター 案内図



○交通アクセス

- ・JR山手線・西武新宿線で来られる方は→ 「高田馬場駅」早稲田口から徒歩約15分
- ・地下鉄東西線で来られる方は→ 「高田馬場駅」7番出口から徒歩約10分
- ・地下鉄副都心線で来られる方は→ 「西早稲田駅」1番出口から徒歩約3分
- ・バスで来られる方は→ 「高田馬場2丁目」バス停から徒歩約5分

○休館日 第2・第4土曜日、日曜日、祝日、夏季・年末年始



日本盲人会連合のご案内



日本盲人福祉センターは、平成20年に全国の視覚障害者並びに関係者からの寄付金及びJKA補助金で建てられました。

社会福祉法人 日本盲人会連合

〒169-8664 東京都新宿区西早稲田二丁目18番2号

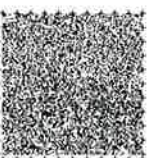
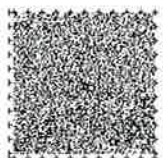
総務部(代表) 03-3200-0011 点字出版所 03-3200-6157

情報部 03-3200-6169 録音製作所 03-3200-6172

点字図書館 03-3200-6160 用具購買所 03-3200-6422

FAX(共通) 03-3200-7755 Eメールアドレス jim@jfb.jp

《ホームページURL》<http://www.normanet.ne.jp/~nichimo/>



運動団体としての活動

1. 沿革

日本盲人会連合は、視覚障害者自身の手で、“社会参加と平等”、“万人のための社会”を実現しようと組織された視覚障害者の運動団体です。昭和23年に都道府県・指定都市の視覚障害者団体の連合体として結成され、国や地方自治体に対して視覚障害者政策（人権、福祉、教育、職業、環境問題等）に視覚障害者のニーズが反映されるように、陳情や要求を行う一方、障害者福祉関係施策に関する研究会、検討会等のメンバーとして必要な意見、提言を行うなどの運動を続けています。

2. 組織

組織団体数 全国59視覚障害者団体

会 員 数 視覚障害者約50,000人

理事会、評議員会、総合企画審議会が置かれているほか、専門分野ごとに次の5つの協議会が設置されています。

- ・青年協議会
- ・女性協議会
- ・音楽家協議会
- ・あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師協議会
- ・スポーツ協議会

3. 主な事業

運動団体としての以上の活動のほか、併行して次のような事業を展開しています。

(1) 盲人団体に対する連絡、指導、助成

(2) 情報宣伝活動

傘下団体との日々の連絡のほか、月刊の情報紙「点字日本」（点字版）、「日盲連アワー」（録音版）、「愛盲時報」（墨字版）を発行しています。

(3) 海外関係諸団体等との交流、情報交換

(4) 職域拡大、あん摩・鍼・灸等の生業安定に関する調査、研究

(5) 盲人福祉に関する調査、研究

(6) 全国盲人福祉大会等の開催

全国盲人福祉大会を毎年1回、全国持ちまわりで開催。全国から約2,000人の視覚障害者が参集し、当面する課題等について研究、討議を行います。また全国盲青年研修大会、全国盲女性研修大会、全国盲人音楽家福祉大会なども毎年開き、ノーマライゼーションの理念のもと、あらゆる分野でのバリアフリー化をめざして活動しています。



自由民主党に要望事項の実現を求める



バリアフリー対策実現へ音声信号の実証実験



各種媒体による情報提供



全国盲人福祉大会最終日の大会式典

(7) 文化、スポーツの振興

「全国盲人将棋大会」「全国盲人文芸大会」「厚生労働大臣杯全国フロアバレーボール大会」「全国障害者スポーツ大会グランドソフトボール地区予選会」の開催、「全日本視覚障害者柔道大会」「全国視覚障害者卓球大会」「全日本グランドソフトボール選手権大会」「全国視覚障害者ボウリング大会」の後援など、文化事業やスポーツを通して“豊かな社会生活”の推進に努めています。



全国フロアバレーボール大会



全国盲人将棋大会



全日本視覚障害者柔道大会

福祉センターとしての活動

1. 沿革

日本盲人会連合は、昭和41年に社会福祉法人の認可を受け、現在地において、次のような視覚障害者福祉サービス活動を展開しています。建物は鉄筋3階建1,310㎡。

2. 主な事業

(1) 点字図書館の設置運営

(点字図書20,000冊、テープ図書50,000本、CD図書3,000枚)

(2) 点字出版所の設置運営

(3) 録音製作所の設置運営

(4) 用具購買所の設置運営

(視覚障害者用補装具、日常生活用具の展示、販売幹旋)

(5) 更生相談所の設置運営

(6) ガイドセンター事業

(7) 点訳指導者・専門者養成講習

(8) 音訳指導者養成講習

(9) 点字ニュース即時提供事業

(点字JBニュース、電話ナビゲーションサービス他)

(10) 各種定期刊行物の製作、配布

* 政府広報誌「厚生労働」の点字版「点字『厚生』」、録音版「声の広報・厚生」(受託)

* 政府発行の「厚生労働白書」及び「障害者白書」の録音版(受託)

* 海外の視覚障害者の動きを伝える「ワールド・ナウ」(点字版)など



点字図書館



点字出版所



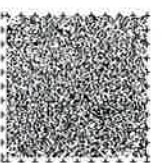
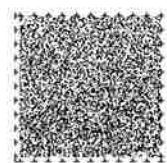
録音製作所



用具購買所



研 修 室



災害は
忘れないで
確実にやってくる

視覚障害被災者の10年

阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録

あの時、視覚障害者はどのように避難したのか
ボランティアは何が出来たのか
救援体制はどのようなものだったのか

未だ各地で揺れが収まらぬ地震国ニッポン

阪神・淡路大震災から10年の時を経て、視覚障害者の立場からあの日をふりかえり
明日にも起こるかもしれない災害に備えて、今、ここ、神戸より発信する。

視覚障害被災者の 10年

阪神・淡路大震災
メモリアルイベントの記録



B5版 124頁 定価 本体2,500円+税
(税込2,625円)

☆ 私たちは推薦します ☆

岩橋明子 日本ライトハウス 会長
笹川吉彦 日本盲人会連合 会長
高橋 実 視覚障害者支援総合センター 理事長
田中徹二 日本点字図書館 理事長
本間昭雄 日本盲人社会福祉施設協議会 理事長
全国盲老人福祉施設連絡協議会 会長
築島謙次 国立身体障害者リハビリテーションセンター病院
第三機能回復訓練部 部長

(50音順 敬称略)

第1章 メモリアルイベントをふりかえって
～報告と提言～

第2章 視覚障害被災者5名の体験発表

第3章 基調講演 川越利信氏 (元ハビー代表)
「被災・支援経験を語り継ごう」

基調報告 久保明夫氏

「視覚障害被災者1000人アンケートから」

第4章 パネルディスカッション

付録 CD-ROM

- ・本書内容
- ・オリジナル曲「勇気」(音楽CDプレイヤーで再生できます)
- ・IBM ホームページ・リーダー バージョン 3.01 (お試し版)

お問い合わせ

発行：特定非営利活動法人

神戸アイライト協会

〒651-0068 神戸市中央区旗塚通 5-3-26-101

Tel 078-252-1912 Fax 078-252-1926

URL <http://www.h3.dion.ne.jp/~kobe87/>

E-mail kobe1999eyelight@w3.dion.ne.jp

郵便振替口座 00910-2-144641

口座名 神戸アイライト協会

※点字版もごさいます。お問い合わせください。

「視覚障害被災者の10年」（阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録）

はじめに

あの日から、十年の月日が過ぎた。その間、国内でも世界でも、数え切れないほどの天災・人災が起こった。誰しも自分がその渦中に巻き込まれるとは想像だにしない。しかし、災害は忘れない内に確実にやってくる。そして巻き込まれた者にしか解らない、苦しみと悲しみが残る。

あの時、視覚障害者はどのように避難したのか、ボランティアは何が出来たのか、救援体制はどのようなものだったのか等について改めて検証し、今後へ向けての発信をしたいとの願いから、神戸アイライト協会では、2004年12月にフォーラム「あの時、わたしたちは！」―視覚障害被災者の10年―を開催した。

フォーラムは多くの反響を呼び、当日の記録ビデオへの申し込みが相次いだ。私達は、改めてこの体験を語り継いでいく必要性を痛感した。そこで、この際、当日の記録を1冊の本にまとめ、世に出すことにした。

被災者にとって重要なのは、今までの生活経験がまったく役に立たないことだ。特に視覚障害被災者にとって、経験が通用しないことは、一番の難点となる。避難所での生活は不可能に近い。救援物資の配給や炊き出しの場所、給水車のくる時間など、殆どが壁に貼り出される。誰かが気付いて読み上げてくれるのを待つしかない。

その他、被災者には各種手続きが必要になるが、リ災証明書一つをとっても、臨時に設置された市役所へ出かけたり、また生活福祉資金の特別貸付を申請するにも印鑑証明や保証人等が必要となる。家が潰れた人が印鑑証明を持っているわけもなく、これまた市内に分散した役所を書類を持って尋ね歩くこととなる。潰れた建物が道を塞ぎ、波打った道路は手引き者がいなければ、とうてい歩けない。

こうした状況の時、力を発揮するのは日常的な「つきあい」ということが言える。ボランティアとユーザーの双方が、お互いの住所や家族構成などを日頃から熟知して交流していれば、被害の軽い誰かは救援に駆け付けることができる。小さい地域（コミュニティ）の繋がりこそが、いざという時、役立つことを痛感した。最近では、町村合併などで地域がどんどん広がっているが、福祉という観点からは、せめて中学校区程度のコミュニティを確立していくことが必要なのではないか。

この本には多くの提言や、示唆に富む意見が報告されている。また、視覚障害被災者の貴重な体験発表も掲載されている。フォーラム当日に発表された話し言葉を、できるだけ忠実に再現した。読みづらい点があれば、ひとえに編集者の責任である。

明日にも起こるかもしれない災害に備えて、視覚障害者は勿論、福祉施設関係者やボランティア、そして全ての人々にご一読戴ければ幸いである。

編集委員 木村文子（きむら あやこ）

目次に戻る

「視覚障害被災者の10年」(阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録)

第1章 メモリアルイベントをふりかえって ～ 報告と提言 ～

神戸アイライト協会 理事長 新阜 義弘

I 趣旨

神戸アイライト協会主催の阪神淡路大震災復興10年メモリアルイベントを振り返ってまとめてみた。私たちが体験したことや教訓として残したいことをいくつか挙げながら、視覚障害者の防災や安全な街作りに生かしていければと考えている。

II ねらい

- (1) 阪神淡路大震災で被災した視覚障害者として、その貴重な経験が語り継がれることの重要性を、一人一人が考えてみたいと思う。単に経験談に終わるのではなく、多くの災害からの復興のメモリアルでもない、明日につながる何か、視覚障害者の災害時援助指針、防災時援助目標マニュアルとして書き残したいと思ってる。
- (2) 10年という時間の長さは、時の流れや、ある意味での体験の風化を感じさせる。こうしたメモリアルイベントの引き続きの開催を通じて、継続、風化させない運動のエネルギーとその必要性を高めていきたいと考えている。それぞれ個人の問題意識を持ち続ける努力をしていきたい。
- (3) 震災資料や文献を整理して、障害者、もしくは視覚障害者に関しての資料や情報を蓄積して、「災害時にいかにこの経験から学べるか」という視点を持った文庫開設、文献収集ができないかと考えて、この会の集約的まとめとしたい。様々な調査やアンケート結果をデータベース化しておくのも貴重なことである。
- (4) 被災視覚障害者当時者の声や意見を積極的に前面に出していけるか、視覚障害者をサポートする人達に理解してもらえるか、また、それがこれからの施策や様々な防災に反映させていけるかという視点を持つことである。
- (5) 災害時の視覚障害者支援体制の緊急的な整備をどのように構築していくか、時間的にも支援体制を整備し、短期・中期・長期目標をどう整理していくかが求められているように思う。こうした観点からの具体的な視覚障害者防災計画(国と都道府県、市町村の各レベル)が作成できる状況を現実的なものとしたい。(各専門施設、団体、行政、民間で考えていく)

III メモリアルイベントから学ぶこと

- (1) 避難時に所定の場所へ避難しなかった人が意外に多かったのはどうしてだろう。家屋が無事だったのは当然の理由だが、一番多かったのは、避難所に行きたくなかったということであった。それは、トイレや居場所等の移動の問題と、救援物資や安否確認の貼り紙等、文字情報の問題で行かなかった人がかなりいたようである。盲導犬関連や糖尿病、人工透析といった、視覚障害者と切り離せない関係の問題で避難所へ避難しなかった人もいるようだ。
- (2) 地域における視覚障害者と近隣住民との関係、コミュニケーションがどのようにうまく取れているかが、避難時や復興の全ての段階で大きな意味を持ってくるようになってきている。近隣の関係、近所づきあいが防災面からも大きな役割を占めている。
- (3) 大規模災害における視覚障害者関連施設や団体の協力関係、組織間ネットワークが十分に機能や専門性が発揮されているかが疑問視されている。これからも発生が予測されている東南海地震や関東近郊での大地震、台風による風水害への避難、誘導、復興支援等に協力関係が必要となっている。
- (4) 避難の過程が、一般避難所→二次的避難所（福祉施設や病院等の場合が多かった）→仮設住宅→復興住宅という経路もあったが、それぞれに引っ越した時、それらの住宅周囲の状況や情報がわからなかったり、歩行訓練やガイドヘルプ等サポートする人との連携がうまく取れなかったりという声もあった。
- (5) 緊急的に困った時や災害の対応、関係施設情報等、どこに相談すれば抱えている問題を解決できるのか、不安感や焦燥感があった人が多かった。
- (6) 復興も含めて被災時から仕事がしたいのに、場所や固定客の分散、保健所の許可や資金が課題となってできなかった。仕事や住宅等、真の復興をどの点でいうのかにとっても個人差がある。
- (7) いざという時に頼りになる人間関係を日ごろから考えておくこと。高齢化や障害の重複化、一人暮らし世帯の増加等の要因を考え合わせると、住宅周囲の人とのコミュニケーションを密にしておかねばならない。また、家族、ボランティア、近隣の人、友人・知人も大切なネットワークとして考えたい。
- (8) 一般避難所（学校や公民館、体育館）では、移動とトイレに困るし、情報も掲示板で知らされることが多かったので、専門的な避難する施設を日ごろから準備してほしい。避難する時は自分の希望する場所に行けないので、二次的に専門的な対応ができる避難所が必要である。視覚障害者専用がよいが、サポートする人達もある程度介助の技術のある人が望まれる。

- (9) 安否確認をするためには、地域や消防関係者に自らの存在を知ってもらう働きかけも必要である。プライバシーの問題で難しい点もあるが、日ごろから援助してもらう時にも、消防関係では即応できないので、常に個人レベル、組織レベルでの防災に関心や興味を持ち防災意識を高めておきたい。
- (10) 防災に関しての身近な事柄を大切にした方がよい。日ごろから緊急時に家族と集まる場所や施設の確認、防災上、役立つグッズの情報を収集している人もいた。携帯電話と白杖や常備薬、通帳類等を手元に置いておく。
- (11) 社会基盤整備や人的資源の有効的な活用により、[大規模災害]に対しての公的な支援と個人や当事者団体での予防的措置への自主的な取り組みを、できるところから始めていくべきではないか。

IV 今後に向けて

この会を通じて、改めて10年の時の重さを実感させられた。被災時から復興の段階まで、当事者がたどって来た経験や体験は貴重な資料として語り、残していくべきだと感じた。それが将来的に、防災も含めて、社会的施策や家庭生活までの様々な場面で役だっていくものと信じてやまない。自らの安全は自らの手で守ることは大前提ではあるが、視覚障害という大きなハンディキャップを持っている人達が、安心して生活するための方策を街作りや地域防災計画に活かしていけるように提言していきたい。

高齢化、重複化している視覚障害者が、避難・救援・復興・防災の体制の中で、専門的な援助や設備の情報の取得方法と効果、視覚障害と共に透析やインスリン等医療の連携を日常的に考えていく必要がある。地域での生活や近隣の人との交流の重要性は認識している当事者の人は多いが、それをどう今の生活に反映させるかが課題であり、独居生活している人への支援体制が鍵であるといえる。いかに自分の存在と被災直後の一次的な避難での安全の確保が大切であるかがわかる。それに引き続き、安心して避難できる視覚障害者専門の援助者の確保や、避難所機能を持った施設が地域レベルで考えられないかということも重要である。その具体的な施設として生活施設の盲老人ホームや盲学校の寮等も二次的避難所に考えられないか。避難・救援・復興・防災の段階で必要に応じて施設と設備と人（支援者）をどのように結びつけていくか判断するコーディネーターの育成や、支援基地の構築が必要だと考えた。いかに迅速に視覚障害者の防災に関するネットワークづくりが行えるかが、当事者と専門家組織のサポートする人達の大きな課題である。

目次に戻る

「視覚障害被災者の10年」(阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録)

第2章 視覚障害被災者5名の体験発表

「盲導犬と共に」

神戸市東灘区 戸井 美智子(とい みちこ) (一戸建て全壊)

東灘から参りました戸井美智子でございます。

私の体験といっても、この前の震災時、実際に私はこちらにいませんでしたものですから、皆さんのように本当の恐怖とか、不自由さ、それからいろんな困難を経てこられた方にとりましては、そんなものは体験にならないと思われるかも知れないですけども、その日のことはやっぱりちゃんと覚えています。

不思議な偶然でございますけれど、私の犬ありさは関西盲導犬協会の出身でございます、その時にも出身者何人かと集まりまして、いろんなおしゃべりをするのを楽しみにしていたのです。ちょうどその年は15日(当時の成人の日)が確か日曜日だったと思うんですね。16日が振替休日だったので、皆さんとおはかりして15・16日がいい? 16・17日がいい? ということだったのです。で、結局決めたのが16・17日だったんですね。だから私はその時、京都の関西盲導犬協会の訓練センターに居りまして、神戸にはいなかったのです。

ですけどひどい揺れを感じまして、一緒にいた出身者の方と犬2匹、いやーすごい地震だということで、もうびっくりして起き上がりました。いったいどうなっているのだろうと思ってラジオをかけましたら、すでにブロック塀が倒れてどうか、亀岡の話をいろいろしていたんですね。そのころにはローラという盲導犬がいたのですが、ローラもあまりの揺れに立ち上がって「きゅー」とか鳴いたんですよ。

相当ひどい地震だと思っていましたら、そのうちに神戸からの地震だということで、神戸が相当被害にあっているというのを聞きまして早速電話をしたら、もう電話は通じませんでした。テレビで高速道路が落ちたとかひどい被害がでていることが映しだされて、皆でこんなことってどうだろうと言っていたのですが、私は家のことは心配ないわと勝手に思っていたのです。そうしたら10時ごろにやっと電話が通じて、姉から家はもう住めない状態だよっていうことを言われたんですよ。

どういうことかと言いますと、家自体は地震でつぶれたのではなくて、後ろに、裏側に石垣がありまして、その石垣が地震で全部壊れたのです。高さが5メートルほどぐらいで、幅が10メートル近くあるものですからね。それが全部家の中に入ってきましたから、裏側は全部壊れてしまってもう住むことができないよっていうことだったのですね。

それでもなんか本当のような気がしないでいましたが、2日後に家に帰りますとその辺は石だらけでした。私は部屋の窓のそばに寝ていたのですけれど、隣の家のレンガ塀が崩れて中に入っていたのですね。ベッドの上にはそれが載ってまして、部屋の中はもう本だらけで、本箱から本が全部落ちてしまっ。もし私がそこにいましたら怪我だけで済んだかどうかというところでした。ローラは本箱のところにいましたから、本の下敷きになって、あの子はおとなしい子でしたから後遺症で立

ち上がることもできなくなったかもしれない、本当にちょっとした差で、それも本当の偶然で居なかったものですから難を逃れて、ただただもう感謝のほかはなかったのです。

それからですけれども、家は壊れましたけれども亀岡のセンターの方に避難させていただいたんですよ。家族は皆、仮設にも入らずに、京都の親戚の家に行ったので、私はセンターのほうに3月の末までローラと一緒に居らせていただきました。

本当になんというて良いのでしょうか、偶然だけで済まされない、皆さんのお助けがあったからだ、もう今でも感謝のほかはないのです。先ほど「勇気」という歌を歌いながら、その時代のことを思い出して涙がこぼれそうになりました。

その時には本当にひどい目にお遭いになった方がたくさんたくさんおられまして、命を落とされた方も多くあることですが。これからこういう災害がないとは言えません。その時に障害者が1人残らず皆さんに見守られているようにしていただけることをお願いしたいと思いますし、私たち自身も周りの人々との交流を大事にしてその時には何かお手伝いいただけるようなこともしておかねばいけないんじゃないかな、とつくづく新潟のことも思いながら考えている次第でございます。

いろんなお話をしたいことがありますけれど、時間がございますのでここで失礼いたします。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」（阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録）

第2章 視覚障害被災者5名の体験発表

「悪夢から十年」

芦屋市 富井 誠(とみい まこと) (マンション全壊)

芦屋市から参りました富井誠と申します。

皆さん、立派な発表につきましては、あとの方にお任せいたし、私はちょっと所信というか、そういうものを言わせてもらい失礼いたします。

悪夢のような震災からまもなく10年になりますが、この10年という歳月を、皆さま方はどう受け止めていられるのでしょうか。

よく決まり文句に、何々からはや何年とか、夢のように過ぎ去って行ったあの何年などよく言いますけれど、私にとってこの10年は「早や」でも「夢のように過ぎ去った」でもありません。恐怖と落胆、そして諦めから始まっていったのです。

1995年の1月17日午前5時46分、寝ておりました時にドンと突き上げるような縦揺れがありました。それが収まって、ひと揺れごとに「びしっ、ばしっ」と物の壊れる音がして、同時にタンスが倒れて、上に載っていた荷物が私の頭を飛び越し落下するのを感じ、恐怖に駆られました。ちょうどわが家は部屋の出入り口の上にガラスがはまっていたのですが、これが布団の上に雨のように降ってきまして、もう少し起き上がるのが遅かったら大怪我をするか、あるいは命を落としてしまうところでした。

本震の揺れが収まりまして、今にも傾いて倒れてしまいそうな家の中で、まず何をすべきか判断するのに多少の時間がかかりました。片付け始めたんですが、それこそ壊れてしまったすべての家庭用品がごみと化しました。

そんなものをゴミ袋にいくつ詰めましたかね、何度捨てにいったのでしょう。ごみを集める場所と家との間を何往復したか、もう忘れてしまいました。

そうこうしているうちに夜になりまして、周囲の勧めで避難所に行ったわけですが、報道のヘリが避難所の上を低空飛行で飛んでくるんですが、そんな時ですね、周りのガラス戸がビリッと響くんですね。神経過敏になっていますので床も揺れてるような気がしてくるんです。そんな恐怖でありますとか、何か本当に得体の知れない脅え、ずーっと過ごしたあの何日かの体験というものは忘れられないですね。

そうこうしているうちに4月になりまして仮設住宅に当たりました。入ってみたら分かるんですが、音は聞こえますけれども、とにかくプライベートが守れるので仮設住宅に入ったときは嬉しかったですね。

で、何日かかけて荷物を運び入れ、仮設の中を片付けました。このままではどうにもならないので、あんまマッサージの仕事をしていますのでそれを始めました。患者さんも何人か来てくれましたが、電話をいただきまして「今仮設でやっているんです」と言いますと「仮設か、じゃまた後で」と仮設住宅を拒否されてしまうようなケースが何回かありま

してがっかりしました。

当然のことながら仕事がひまですし、することがないので、図書をよく利用しましたね。点字とかテープ図書とか、それからその後に出てきましたデイジー図書とか。あれはかさだかい荷物にならなくて、私たちにとって大変助かっています。

そんなことで退屈を紛らして、僕はそのまえからパソコンをちょっと触っていたんですけど、当然仮設は狭すぎますのでできません。それと、今は一緒にいますけれど、その時は盲導犬と一緒に生活ができないのでとても不自由でありましたし、大変寂しい思いをいたしました。

本当にありがたかったのは、どなたもそうでしょうけれども、たくさんの方から励ましをいただいたことです。

私の場合、出身が遠いものですから、なかなか多くの方々に会えないのですが、電話で本当に何十年ぶりに聞いた声とか、あの人もいたのだというような方から励まされて本当に嬉しかったのを覚えています。

そうこうしているうちに3年ほど仮設住宅住まいをしたんですけども、とにかく自分の住んでいたマンションを再建することになって、役員会とか、そういうものに出席したのですが、その時にですね、見た目を気にするのかわからないんですけど、バリアフリーという言葉が徹底的に無視されてしまいました。ですから私が今住んでいるところは、スロープというのは名のみの高い階段があります。とりあえず自分の家に住めるようになり、今こうして生活しております。しかし精神的なショックと言いますか、その後遺症みたいなものは今でも僕には残っているような気がします。

ですから、先ほど中越地震の方のご挨拶がございましたが、本当によく苦境は分かります。今日いらしたのを機会にいろんな方の意見を聞いて障害者のことについてもどうぞ目を配っていただきまして、弱いものがちょっとでもきちんとした生活ができますようによろしく願いしたいと思います。

まだ途中、話が下手なんでいっぱいいろいろ用意してたんですが、とりあえず時間がきましたのでこれで終わらせていただきますけれども、どうぞ皆さん、今年もまた不順な気候で何があるか分かりませんが、お互いに気をつけましょう。

どうも失礼いたします。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」（阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録）

第2章 視覚障害被災者5名の体験発表

「真実の報道とは？」

西宮市 片倉 早苗(かたくら さなえ) (一戸建て全壊)

皆さん今日は。西宮から参りました片倉早苗と申します。どうぞよろしく願いいたします。

震災体験ですが、私は1月17日午前5時46分は自宅のお布団の中にいました。そろそろ起きようかなー、ちょうどその日はお友達の就職のことで京都に行く約束をしてたんです。9時に駅で待ち合わせをしておりましたので、少し早く起きてちゃんと朝の支度とか、帰りが遅くなったら困るので夜の用意も少しだけして行こうかなーとか、いろいろお布団の中で考えていたら、下からドーンと突き上げられ、びっくりしました。それで急いでお布団を頭からかぶりしました。そしたらとたんに私の横にあった大きなタンスが私の上に倒れてきて、それからもうあっちこちでいろんな物の壊れる音、私はもうこれで私の人生終わりやなーって、その時思いました。

それでしばらく経ったら揺れが止まって、そしたら隣の部屋で寝ていた息子が「お母さん、真っ暗でなにも見えへーん」と言うたんです。それで私が「なに言うてんの。お母さんなんかもうずうーと見えないのよ。一生見えへんのやからあんたはしっかりして早く服を着なさい。お母さんもお父さんにタンスを起こしてもらって起きて服を着るから、どんなことになるかわからへんから、とにかく早く服着なさい」と言いました。夫にタンスを起こしてもらって、私はそこから這い出して洋服を着て、そして、あっそうや、シルキーは？ あの頃の私の盲導犬はシルキーと言うたんです。シルキーはどうしているんかと思うて急いでリビングに這うようにして行きました。そうしたらシルキーは震えて立ち上がっていました。シルキーの周りには本がいっぱい落ちてて、ああーかわいそうなことをしたな、こんなところに寝かせておいてと思いましたが、とにかく何とかしないといけなと思っていたら、ご近所の方が玄関をどんどんたたいて「早く逃げましょう。一緒に逃げましょう」と言われるので、出ないといけないのかなあと思って。でも玄関へ行こうとしても、いろんなものが倒れたり壊れたりしていて、狭い家なんですけど玄関までなかなかたどりつけないんですね。

それでやっとの思いで玄関へ行きて、そして外へ出ました。ご近所の方もたくさん出てきて、あーびっくりしたねとか言って。どこが震源地か分からないし、何がなんだか分からないし、ちょうど私の夫が小さなラジオを持っていたので、それをかけてみましたら淡路津名郡のほうで震源地だと言っていました。それでご近所で怪我をした人がありましたので、病院へ連れて行く手配とかいろいろしてありました。隣の奥さんに「避難所に行きましょう。もうあの家に入ったらまた何があるかわからへんからとにかく避難所に行きましょう」と言われたのですが、私は断りました。

それはどうしてかと言うと、まずお手洗いですよね。私たちは見えな

いので、まずお手洗いが困ります。それでその方に「私は避難所に行きません。何とか家の形が残っているみたいなので、もう一度家に帰ります」て言うたんです。そしたら「そんなことしたら危ないじゃないの」と言われましたが、「避難所なんかの広いようなところに行ったら、とにかくお手洗いが私たちは一番困るので」と言ったら「それくらい連れて行ってあげるやないの」と言われました。1回か2回は連れて行ってくださると思います。でも何度も何度もお願いしますお願いしますなんて言えませんか、その方だっているいろんなことがあるので、大変だなーと思われる時もあると思います。だから私はとにかく家族4人家に帰りますって言いまして、家に戻りました。そして靴のまま皆で家の中に入って、どうしようー、どういう風に片付けようーって言うたんです。

それで、あっ、友達と約束してたんや。どうしよう、電話がかかるとかと思ったら電話は駄目でした。それで子供に駅まで連れて行ってもらって公衆電話のところに行きましたら、長い長い列ができておりました。やっと私の番が回って、そして友達のところにかけたのですが、もちろん連絡は取れません。同じ市内だったのもう電話は駄目でした。それで私の妹が大阪にいますので妹のところだけに電話をしました。私のうしろにも、もう長蛇の列がまたできているんですよ。だから早くしないといけなくて、とにかく元気だからね。無事だったからねということだけ連絡して。家へ帰ってもぐちゃぐちゃになっているので、とりあえず皆が座れるところを作らねばならないということで少しずつ片付けました。

ずーっとラジオをかけていました。次から次から悲惨なニュースが入ってくるんですよ。それを聞いて、私たちは助かったのだなー、何とか生きているのだなーと思ったらすごく嬉しくて、誰かが守ってくれたのかなーと思いました。夜になって寝るときには、いつもだったら盲導犬は私たちのそばには置かないで別のところで寝させるのですが、子供がシルキーだけ別のところに寝させるのはかわいそうや。また地震があったらどうすると言うので家族4人と盲導犬1匹で毛布をかぶって寝ました。

次の日もただなんとなくぼんやりしていました。私は関西盲人ホームというところが西宮市内にあるのですが、やはりそのことが気になりました。私もそこで少しお仕事をさせてもらっていますので、子供に頼んで連れて行ってもらいましたが、途中の道はもうすごいものでした。酒屋さんの前なんかは空き瓶がこわれているし、道路はでこぼこだし、とにかく1人ではとてもじゃないけど歩けない、そんな状態でした。やっと職場に辿り着いたら施設長さんが居られて、みんな元気で近くの教会に避難しているよと言われたので、ああーよかった、私も元気ですからと言ってまた家に帰りました。

その次の日に大阪の妹の家にみんなで行きました。その途中でシルキーを亀岡の関西盲導犬協会に預けました。落ち着くところがあったら迎えに来るからね。それまでおとなしく待っててね、と言って別れました。

それでしばらく妹の家で世話になって。でも西宮の家を早く解体しないといけなかったと言われましたので片付けに帰ってたんですね。ある日、片付けに帰っている時に電話で盲導犬使用者の人を取材させてほしいという電話がありました。で、いいですよと言ったら記者さんが来られて

いろいろ質問されました。それで写真はありますかと言われたんです。写真ね、家の中がめちゃくちゃになってるし写真はどこにあるのかわからないからと言うたんですけれど、何とか探していただけませんかというので、じゃ探しておきますと言ったら、またお昼から電話がかかってきてありましたかと言われたので、何とか1枚見つけたのでありましたと言ったらその写真を取りに来られて、そしてその記事が中日新聞に出たんですよ。

私はどんな風に書かれていたのか全然分からなかったのですが、中日新聞に出て、それをご覧になった東京のTV局の方がね、また電話をかけてきて、シルキーはどうしてるんですかって言うから、盲導犬協会に預けています。ライフラインが全然途絶えてしまってお水一滴も止まっているので、とにかく私たちの生活だけでも大変なので盲導犬協会に預けているのですよと言ったら、会いに行ってくださいって言うんですよ。交通費と手引きは用意しますから会いに行ってくださいって。それで私は断りました。そんなことできません。こんな大変な時にいくら手引きがあってもよう行きません。それとシルキーはすごく甘えたなので、たぶん私が行ったら喜んで喜んで、そしてお母さんが来たからお家へ帰れると思ってしまいます。どんなにがんばってもどうせ連れて帰れないのです。だから会いに行きたくありませんと言うたら、長いこと押し問答の結果、その電話はやっと切れたのです。そうしたらまた次の日に電話がかかってきてまた同じことです。それで私は途中で切りました。

それで報道ってこんなものかなーって思いました。本当に人が困っていて大変な思いをしている時にね。テレビで私がシルキーに会って、そしてシルキーが喜んで喜んで、私に飛びついてきて顔をなめると思うのです。私だってそんなことをされたら嬉しいし、もう愛しいからたぶん涙を流してしまうと思うんです。そんなところをテレビで放映したらご覧になっている方は、盲導犬ってこんなにいいらしいんや、こんなやと思われるかもしれませんが、そのために私たちがどんな思いをするか、そういうことを報道の方はもっともっとわかってほしいなーって、あの時は思いました。

それからあと夫が入院したりいろいろありましたが、無事にマンションを借りることができましたので、結局私たちは避難所生活とか仮設住宅で暮らすことはなかったんですが、仮設住宅や避難所で住まわれた方は本当に大変だっただろうなーと今でも思っています。

9月の5日でしたかね、6日でしたかね、震度3か4の地震がこの辺でもありましたよね。あの時は本当にびっくりしました。また地震と思ってね。やっと私たちも新しい家ができ落ち着いたのにまた地震と思いました。そのときに家族で話し合ったのですが、10年前は朝だったので家族は皆んな揃っておりました。でももしもお昼とか夕方とかに地震がきたら、家族はてんでんばらばらになっていると思うんですよ。そしてどんな風に連絡を取り合ったらいいか。今は携帯電話が普及していてそれぞれ持っておりますので、何とか連絡が取れるかもわかりませんが、やっぱりどこかへ集まる所を決めておかねばいけないね、と話し合いました。私たちの家では、家から歩いて10分か15分の所に西宮市総合福祉センターがあるから、何かあったら必ず、とにかくそこへ行こうね

って話し合いました。

10年前、私たちに声をかけてくれた人はみんな、「お互いに元気でよかったね」と言ってくれました。今はそういう声はもちろん聞かれません、この頃はなぜか「がんばってね」と言う人が多いですね。何でもがんばるのかなあー、何をがんばるのかなって時々考えたりします。あの時はお互いに大変だったので「お互いに元気でよかったね。気をつけてね」という言葉があったんですよね。私は新潟の方にも、とにかく元気でそして気をしっかり持って、これから寒くなってくるので風邪など引かれないようどうぞ気をつけてお過ごしいただきたいと思います。

失礼いたしました。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」（阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録）

第2章 視覚障害被災者5名の体験発表

「悲しみは消えず」

神戸市灘区 坂東 順治(ばんどう じゅんじ) (アパート全壊)

皆さん、こんにちは。神戸市灘区から来ました坂東順治です。

本日は私と娘美香との思い出を話させていただきたいと思います。私の娘美香は昭和53年1月2日に生まれました。私の次女です。いま懐かしく思い出されるのは、私が神戸市立盲学校に入学した時のことです。同時に美香も中学校に入学しました。私が今、三療師として開業できたのも美香がいたからです。それは私が理療科3年で美香が中学3年、お互いに受験に向かって勉強をした時のことです。

特に1月からの最後の追い込みの頃です。家が狭いため部屋数が少なく、よく、午前1時過ぎに掘りコタツのある部屋で美香と場所を取り合いしながら勉強をしました。そのおかげで私も国家試験に合格しました。また美香も葺合高校の英語科に入学することができました。本当に嬉しかったです。

そして時々、私が開業している治療院に美香が来ました。お父さん、肩がこったから揉んでほしいとか、冷え性で便秘がちなので、おなかのマッサージをしてほしいとかよく来ましたです。

私の自宅が古く、また娘2人が大きくなったので住んでいる家を建て替えようと、平成7年1月7日に東灘区のJR住吉駅に山側の2階建てのアパートを借りました。私が目が悪いので「お父さん、1階を借りよう」ということで1階を借りまして、家ができるのが平成7年の9月の終わりにくらいということで、そこで半年ほど過ごすことにしました。

地震のあった1日前の1月16日月曜の夜に、私と家内と長女と美香と夕食をとりました。今でもはっきりと覚えています。美香がお父さん、おなかの張るからマッサージをしてほしいと言いますので、私は食事のあとに、腹部マッサージとうつ伏せになって腰のマッサージをしました。そうすると美香は、お父さん、楽になったと喜んでおりました。

1月17日火曜日に、私は朝から仕事がありまして、中央区で治療院を開いていましたので長女の車で送ってもらいました。

「お父さん、お昼の弁当忘れている」と美香から電話をもらったのが最後の美香の言葉です。今でもはっきり覚えています。

そして平成7年1月17日、火曜日に阪神大震災の地震がありました。皆さん、ものすごく上下左右に揺れましたね。私も怖くて机の下に毛布をかぶってじっとしておりまして、10時過ぎくらいに外に出ましたら近所の人々が地震や地震やと大騒ぎされていました。それで私も急いで治療院から自宅へ電話をしたら誰も出ませんので、心配をしまして市バスの雲中バス停の山側からバスを待っていました。それでも道路がものすごく混んでいて全然来ませんので、勇気を出して山手幹線の歩道を東のほうへ歩きました。

2時ごろに家族が住んでいるアパートの近くに来ますと偶然に家内と出会いました。家内も私に来るか来るとか待っていたようでした。そこ

で初めて美香が亡くなったことを家内から聞きました。そのアパートの2階がどーんと落ちてきて、1階を借りていましたので、1階がぺしゃんこになりまして、家内と長女と美香と3人が生き埋めになりました。今でも覚えています。家内が私に、3人が生き埋めになって長女的美穂に声をかけたら重い重いと言っていたので、ああ美穂は生きていますと確認したと言いました。また美香に声をかけたら全然応答がなかったので駄目かなと思った。地震直後に美香の声で「ああ…うう…」と言う声がしたから、もうそこで亡くなったと家内が言っていました。もう10年近く前になりますが、今でもはっきりと覚えております。

そうして美香が安置されている場所、集会所に行きまして美香を見ました。ぱっと見ても、どこも怪我がないのです。私は目が悪いから集会所でずーっと美香の手を持っていたら、だんだんと冷たくなってきましたので、私は大きな声で泣きました。17日、集会所から霊柩車で魚崎の小学校の体育館に移動になりました。私は夜盲症で暗いところは全然見えませんので、17・18日はその魚崎の体育館で美香のそばにいました。19日の夜に私の父親と私の弟と2人で大きい長いライトバンに美香を乗せまして、私の両親のいる高槻に行きました。そして20日に高槻の実家の近くの集会所でお葬式を無事にあげることができました。

ほんまにその時には近所の人にお世話になりまして、ありがとうございます。神戸にいてもなかなか斎場が満員、いっぱいや言われたので、もう早くね、美香ちゃんにゆっくりと思いましたが高槻へ行きました。

最後になりますが、私と家内と長女と3人で、これからもしっかりと前を向いて生きていきますので、皆さま、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

どうもありがとうございました。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」(阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録)

第2章 視覚障害被災者5名の体験発表

「避難所での2ヶ月」

神戸市兵庫区 折野 八千代(おりの やちよ) (一戸建て半壊)

折野です。あれから10年が経ちました。それを思い出すようにこの間新潟で地震がありました。嬉しかったこと、つらかったこと、悲しかったことがよみがえります。

私は神戸市のほぼ中心地兵庫区に住んでいます。庶民的な町で家が古いので、そして梁が強かったということで半壊の査定をいただきました。今度は駄目ですよと言葉も添えていました。

あの時、みんな、殆どの方が同じようなことで、私も大きな地震で揺れが収まるまでじっと我慢をしていました。そして早く外に出たい、早く外に出たいという思いや生きていて良かったという思いの中で、周りが荷物だらけのところを、またぎながら必死になって外へ出ました。寒さのなかでどうしようどうしようと4人で悩んでいたところ隣の方が出てきました。良かったね、これからどうすると言われて小学校にでも行っていたらと言われました。子供たちが通った小学校は家から4・5分もかからないところにあります。

学校に行くと人人人、人だらけです。どうにか入口に座るだけの場所を確保しました。そしてその次考えたのは兄弟や親のところに電話をしようと思ったのですが、電話の前に並ぶと覚えていた電話番号が頭の中から指先へと伝わってきません。何回か間違っってやっとかかりました。そしてまた学校へ戻り、何か食べ物や飲み物はとを考えました。また子供とペアになって外に出るけれど1人では歩けるような状況ではなかったです。自動販売機を探し回ってやっとの思いで自動販売機から4本の飲み物を、そしてたまたま朝パンを作っていたと思うんですけど、市場が開いていましたので、食べる物を少し買いました。別にお腹が空いていたわけじゃないんですけども。

小学校の体育館は3階にあります。一番困ったことは、やはり片倉さんが言われたようにお手洗いです。小学校にはプールがあります。そのプールの水がバケツに汲まれてトイレの周りにたくさん置いてあり、それを持ってトイレで水を流さなければなりません。今までしたことがないことです。そして自分が行きたい時に行くというより人に合わせなければなりません。いつもペアになって一緒に連れて行ってもらっていました。

そしてつらかったことは、避難所には畳代わりの発泡スチロールがありました。その上に毛布をひいて1人4枚ずつとか、十分に毛布が与えられますが、それでも着れるだけいっぱい服を着てカイロをして体を小さくしても寒くて寒くて寝られなかったこと。そして風邪をひいて声が出なくなるような状況があったこと。それらがとてもとても今思い出されます。

嬉しかったことはたくさんあります。言葉ではなく行動で表していただいた人の心。本当に感謝申し上げたいと思います。そのなかでいくつ

か。

3日目、殆ど被害のない西区の友達が奥さんの運転で夜迎えに来てくれました。夜だったら大丈夫だろうということで小さな子供さんを家に残して来てくれました。そして普通は20分くらいかかるのをどれだけかかったか覚えていませんけれど、そこで暖かいお風呂、暖かいお布団で寝かせてもらえました。

私たちは仮設に水が出るまで、そしてガスが出るまでということで3月までいました。学校ぐるみで一生懸命にやってくれました。他にも、近所の方が北区というところ（それほど被害のない地域）のお風呂に連れて行ってくれました。そして暖かいものを食べさせてくれました。そしてまた暖かいものを食べにきてと言われて、食べさせてもらいました。食べ物以上に暖かさを感じました。

それから、東京からお電話ですと言われて、私はそんな電話がかかってくるはずがないのになと思ったけれども、その電話は声も聞いたことのないしゃべったこともない人でした。私は点字の本を日本点字図書館から借りていました。学生時代から。そしてその貸し出し係りの方といつも文通をしていました。それが30年、もっとなるかもしれません。その方から「ずいぶん探したんですよ」と言われました。「無事で良かったですね」と言われました。私は聞いたことのない声に感動しました。今の館長、岩上さんの奥さんです。そして何か送りましょうかと言われてもとっさには思いつきませんでした。ウェットティッシュやマスク、そしてカイロなどを2度も送ってくれました。本当に本当に感動しました。

それから、いつでも片付けますよと言ってくれた人がいます。片付けてくださるのは嬉しいんですけど、私たちは置いた場所が分からなくなってしまうことがあります。ではタンスだけ起こして下さいますかということで、男の人が3、4人来てくださってタンスを片付けて下さいました。それで周りの荷物を見たとき、どうしてこんなことをしなければならぬのと涙が出ましたけれども、学校にいながらず少しずつ片付けていきました。とっても嬉しかったです。

私たちは幸いに半壊という判定をいただきましたけれども、やはり家が燃えて何もなくなった障害者の人もたくさんいらっしゃいます。小学校に避難した初日に、知り合いの方の子供さんが亡くなっているのをラジオから聞きました。そしてそのあと奥さんも亡くなっていました。

そして10年経った今、バリアフリー化が進み、そしてボランティア元年と言われています。そしていろんなボランティアさんが今も助け合いという名の下に活動していらっしゃいます。とっても嬉しいことです。

あれから10年経って、パソコンもそして携帯電話も使えるようになりました。あの時そういうものがあれば、本当に今がもっと違っているかなと考えます。私たちは避難所に行きましたけれども、障害者が避難所で過ごすことは私はちょっと不可能かなと考えます。何かがあった時に私たちが情報を得るためには、やはりラジオです。私は出かける時、バッグの中に定期券、障害者手帳、そしてラジオ、少々のお金などを入れて、いつも持ち歩いています。これから何が起こるかわかりませんが、情報源としてそういうものを持たなければならないと思います。

そして私たちが避難所で生活がしやすいように、近い所に障害者がいつでも行けるような場所がやはりいるのではないかなと思います。これからの高齢化社会、いろんな町にデイサービスとか憩いの家があるように、視覚障害者にもそういうような場所があるのがいいかなあと私は10年経って今思います。まとまらないですけど、そんなことを考えます。

その時「視覚障害被災者支援対策本部ハビー」ができて、若い青年たちに来ていただいて、物を持ってくださり、そしてハビーに全国の皆さまから多くの義援金もいただき感謝申し上げます。

まとまらない話で申し訳ありませんでした。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」（阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録）

基調講演 「被災・支援経験を語り継ごう」

川 越 利 信 氏

阪神大震災視覚障害被災者支援対策本部（ハビー）元代表
JBS日本福祉放送（社会福祉法人 視覚障害者文化振興協会）

本日の資料によりますと、6,430名の方が阪神・淡路大震災の犠牲になられたと記されています。私の持っている資料では6,308名となっていますが、おそらく地元でお聞きになった最新のデータだろうと思います。あらためて18人の視覚障害者を含めた6,430人の方々に哀悼の意を表したいと思います。

逆に今こうして生かされていることにあらためてありがたさ、感謝の念を持つのですが、同時に何かをしなければならない義務みたいなものも、持たされているように思います。何ができるか分かりませんが、ただただ己の欲だけで終わる人生でなければいい、そのように努力したいと念じているところであります。

今日は阪神大震災10周年メモリアルイベントということで、視覚障害被災者の10年というテーマでこのイベントが開催されております。いわばこれは語り継ぐ会みたいなものの一つと理解しております。午前のお話、プログラムなどは、まさに語り部そのものではないかと思っています。

【今日の話のキーワード】

今日お話しする中で大切な言葉がいくつかあります。そのキーワードを予め申し上げておきたいと思います。

まず、「セルフディフェンス、自己防御」という言葉ですね。自分をどう守るのかということです。それから「認識の差、温度の差」です。火事を見たということと、火事を経験するということの差、地震を見た、あるいは聞いたということと、地震で被災者になること、あるいは支援活動を経験するのでは認識が極端に違うわけです。現に阪神・淡路大震災時、関西・神戸地区の人と、例えば東京の人の認識は、驚くほどの違いがあったということを記憶しています。

次に、「イマジネーション」という言葉。地震のイメージをどう持つかということです。地震が起こったときに、例えば今この瞬間地震が起こったらどうなるか、どうするか。10秒経ったらどうするか、1分後どうするか。家の中だったらどうなるか、あるいは電車の中だったらどうなるか、という地震に対するイマジネーションです。

次は、「地震災害の素因と誘因」です。何かのきっかけ（誘因）でその素因が災害につながる「素因と誘因」。その次に、「脆弱な社会、または社会の脆弱性」ということ。例えば、あの阪神高速道路がひっくり返ってしまったのは言葉にならないような驚きでした。あるいは公立の病院がつぶれたこと。市役所が、公の建物がつぶれてしまう、港湾が駄目になる、そして圧倒的な被害を出した建物。そういう意味の「社会の

脆弱性」です。

それから「災害の抑止力」という言葉。そして、「災害の軽減力および対応力」。災害が起こった時にいかに被害を軽くし、いかに対応するかということです。最後に「的確な復旧・復興」という言葉が出てきます。川越は何をしやべったのか、何も残らなかった、ということにならないように、せめてキーワードの1つでも2つでもいいから持って帰っていただければと思います。

さて、ハビーでも「語り継ぐ会」を2回ほどさせていただきました。その語り継ぐ会の成果物として『ハビーからの伝言』という報告書が「大活字」という出版社から出版されています。この『ハビーからの伝言』は、記録としては語り継ぐ役割を果たしていると思います。しかし実際に今日のこのイベントのように語り継いでいくことは、残念ながら途絶えてしまっております。今回、それを神戸アイライト協会の皆さんが開催してくださっているということです。もう一度思い出して今後につなげるということで喜んでおります。

[阪神・淡路大震災はどんな災害だったのか]

ハビーの活動についてお話する前に、阪神・淡路大震災の規模についておさらいをしておきたいと思います。地震の発生は、平成7年1月17日午前5時46分でした。淡路島北部で起こったマグニチュード7.2、震源の深さ14キロメートル。震度は神戸市内の平均が7。神戸市須磨区あたりで6、京都・彦根・豊岡あたりで震度5でした。亡くなられた方の数は6,430名。そして負傷者は43,782人。被害住宅は394,440棟。次に、火災は294件。3,269箇所の道路が駄目になり、使えなくなった公園が501箇所。あと上下水道の断水、停電100万戸、ガス85万戸ですね。新幹線・鉄道などもしくはほとんど使えなかった、というような規模の大災害でした。

[「ハビー」の支援活動・概要]

それではここで、改めてハビーの活動を簡単に振り返りたいと思います。「ハビー」という言葉は、支援活動を決意した時に、支援組織の名前を一言で言える言葉なら何でもよかったのです。それはJBでもチェリーでも何でも良かったのですが、とは言いつつも何か意味のある言葉をとって作りました。「ハビー」(HABIE: Headquarters to Assist Blind Injured in Hyogo Earthquake)という名前は、要するに阪神・淡路大震災における視覚障害被災者を救援・支援する組織ですよという意味と、呼びやすさを優先して作った言葉です。

活動は、4期に分けて活動をやらせていただきました。第1期目は無我夢中で異常な興奮の中で、あの時活動してくださった方、今日もずいぶんおいでになっていらっしゃいますが、本当に興奮しました。一週間ぐらいは殆ど寝なかったですね。よく体が持ったなと思います。そしてその異常な興奮の中で活動したことを記憶しております。

第1期は、まず支援活動が必要だという認識をするところから出発したわけですが、私たちが何かやるときには、視覚障害者福祉の世界では名の通った方のお名前を頂戴して、われわれが事務局で実務をやるとい

うのが慣例なんです。しかし、ことこの支援活動に関してはその難易度の高さは十分に自覚していましたので、責任を全て自分で取れる状態でやろうと決意して、自らが代表になって組織の設立を進めました。そして支援活動に必要な準備に着手しました。例えばボランティアの確保ですとか、神戸の市役所に赴いて神戸市と色々な交渉をしたりしながら、視覚障害者の安否確認をローラー作戦で開始して行きました。

なぜローラー作戦か、これはたいへん重要な意味があるのです。阪神・淡路大震災の場合は、視覚障害者はもちろん、多くの人々が避難所がどこにあるのか分からないし、神戸市内も、西宮辺りもあまりにもひどい状態でした。人々は空間という空間に避難しました。指定された大きな学校の体育館などに避難されている方々は、食料も衣類も不自由なく過ごされたのですが、避難所に指定されていないところに、空間を見つけて避難された方々は、水も食料も提供されず、ずいぶん苦労されていました。だからあらゆる空間、あらゆる所を、町中をローラー作戦で視覚障害者がいないか探して回りました。予め地図を見て避難所に行くような状態ではなかったのです。第1期は、こういう立ち上がり方をしていたのです。

第1期は、支援活動の現地本部を、神戸市立総合福祉センターの中にある神戸市立点字図書館に置きました。しかし、市の総合福祉センター自体が半壊の判定が出て危険だからということで、出入りが禁止されました。実際、第1期の現地対策本部は、冗談ではなくて、もし余震等による二次災害が発生したら、2日間は生き延びて欲しいと言って活動してもらいました。だからヘルメットとか、食料とか、2日間ぐらいは持ちこたえられるような状態を作って、後方から支援しながら活動を展開していきました。

第2期は、現地本部を兵庫県立点字図書館に移してからの活動となります。そちらの方は安全だということで1月26日に移動しました。兵庫県立点字図書館に移ってからは、建物は安定している状態でしたので安心した中での活動となりました。

ハビの本部は、大阪市内にあるJBS日本福祉放送の中に置きました。と言うか、JBS自体、東京スタジオも含めてすべてが支援対策本部一色でした。支援活動は、JBSと日本ライトハウス盲人情報文化センターが中心となり、ボランティアや多くの人々、企業、日本財団などに支えられながら展開していきました。

第3期目になりますと、義援金の配分とか、いろんな相談なども寄せられるようになって、水・食料等当面の支援だけでなく、緑内障の人たちだとか、特に薬を必要とするような眼疾病の方々のところをバイク隊に助けられながらドクターも一緒に回っていただいたり、そういった活動も行うようになりました。

第4期目になりますと、被災した人が長期的に、例えば学校での生活がうまくいかない、あるいは仮設住宅での生活がうまくいかない、住所を転々としたり、ご主人が亡くなられて奥さまと子供だけで困っている方とか、いろんな方が居られたのですが、そういった方々の相談にのっ

たり、語り継ぐ会を開いたりチャリティイベントを行ったり、報告書を作ったりしました。こうした活動が第4期です。

[ハビ－の活動の概括]

ハビ－の活動全体を概括します。集まってくださったボランティアの方が1,125人。それから、視覚障害者で亡くなられた方が18人、無事であると確認できたのが1,686人です。支援の対象となる視覚障害者は合計1,803人がデータベースに登録されていました。その中で1,686人が無事であると確認できたということです。確認できなかった方々が98名ありました。

視覚障害者の家屋の状態ですが、169人の持ち家の方々のうち、全壊が94軒、半壊が71軒でした。借家の方が179人居られたのですが、無事なのは1軒だけで、97軒が全壊、71軒が半壊ということです。のちほど触れますが、住宅、建物の問題というのは、地震の問題を考える時、本当に重要なテーマになるような気がします。

次に義援金の状況です。42,052,804円、約4,200万円集まりました。視覚障害者に直接現金をお渡ししたのが1,917万円。被災者のご希望や必要に迫られて物資を購入したのが2,007,515円。ボランティアの団体、ボランティア活動をしてくださるところへの支援が245万円です。そしてフォーラムの開催費、報告書の作成、活動費、旅費交通費等々です。最終的に約66万円の不足額が出ました。これはいろいろと苦勞して補いました。

[ハビ－の活動エピソード① 災害時の行政の対応]

ハビ－の活動を進めていくとき、私どもが驚いたのと、カベになったのは行政の方の対応です。例えば、発災直後に神戸市の福祉部に行きましていろいろお尋ねしました。市役所の中は職員の数が非常に少なく、ほんとにまばらで、おられる方も包帯を頭に巻いたり、腕を吊ったりで、病院かなというような感じでした。

「障害者の対策はどうなってますか」と伺ったら、「それどころではない」という言葉が返ってきて、あらためて愕然としました。しかし、市内ではすさまじい火の手が上がっていて、その言葉が通じるほどすさまじい状況であったこともまた事実です。これが平時の発言ならただでは済んでいないでしょうが、そんなことで争っている場合ではありませんので、とにかく支援できる方法を模索していったのです。そんな時でも、人間の習性ともいうんでしょうか、職員の方を捕まえていろいろ尋ねると、いちいち上司の所に飛んで行ってまた走って帰ってきて、追加の質問をするとまた上司のところへ行くという繰り返しです。役所とは非常事態の際も個々人の判断や意思決定は許されない仕組みなのか、今後の災害時の問題を考えていく上で参考になります。

[ハビ－の活動エピソード② 視覚障害者の専門家が駆けつける]

ローラー作戦から始まって、いろんなボランティアに助けられながら活動していったのですが、困ったのは専門家の不足でした。視覚障害のことがよく分かっている関係施設などで働いている専門家が欲しい、痛切にそう思いました。市橋正晴という川崎市役所に勤務する友人がいま

した。「どうにもならん。助けてくれ」と電話で言いました。「分かった。人を集める」と彼は言うてくれました。数日後、彼に声をかけられた若い人たちが関東から支援に駆けつけてくれました。有名な施設から、あるいはプライベートな形で、多くの人が駆けつけてくれるようになったのです。

[ハビ－の活動エピソード③ 苦労の多かったボランティア育成]

支援活動の中で感じたのは、ボランティアの数がいくら多くても、やはり専門家がいなければ視覚障害者の支援活動はできないということです。

今回の新潟地震の場合には物見遊山的にちょっとふざけたボランティアも現れたように聞いています。ちょっと気になります。しかし、その前のナホトカ号による海の油の汚染対策、また最近の水害対策などのボランティア活動では、自覚したボランティアが目立ってきています。自分たちの食料等も携えて、できるだけ現地のお世話にならないよう、迷惑をかけないように活動する人たちが増えてきているように思います。

阪神・淡路大震災の時はいわばにわかブームみたいなところがありました。「ボランティアへの世話の仕方が悪い」と文句を言うボランティアがいて、「君らは何しに来たんだ」と言いましたら、反対に「非人間的である」と非難されるようなこともありました。ボランティアに、混乱した状況のなかにおいて支援活動が可能な程度の認識を持ってもらうための指導はけっこう大変でした。先ほどの市橋君などはボランティアの教育を担当してくれて、毎朝、ボランティアのミニ講座を始めてくれました。何をしたかという、視覚障害というのはどういう障害か、どういう道具を使うのか、白杖には折りたたみ杖と直杖とがあるんだよといった基本的な話をしながら支援対策を進めてくれました。夜は夜で、ボランティアの話の聞き役となり、彼らしい方法でボランティア育成を実践していました。ボランティアの養成は、日常の中でやっておかねばならないことを痛感した次第です。

[ハビ－の活動エピソード④ 『ハビ－からの伝言』を出版する]

ハビ－の活動については、「大活字」という出版社から『ハビ－からの伝言』という本が出版されています。本屋さんで注文すると買えますし、図書館で借りてぜひ目を通していただけたらありがたいと思います。

支援活動の関係文書はすべて神戸大学の図書館に納めてあります。それから『ハビ－の活動報告書』という資料編があります。必要な方は声をかけてください。

[語り継がれていない関東大震災]

実は、私たちJBS日本福祉放送の東京スタジオは、社会福祉法人浴風会という施設に間借りしています。風を浴びると書きます。浴風会という社会福祉法人はとてつもなくでかい法人で、大きな大学のキャンパスと思ってください。敷地が21,000坪あります。その中に高齢者専門の病院もあって、要するに高齢者に関する施設は全て揃っています。そして2,500?2,600名の人間が毎日そこで生活しています。その人たちは、入

2010/02/03

くと、大陸側の岩盤がそんなに引っ張られたら持ちこたえられないという事で跳ね返ってしまう。そのエネルギーが地震ですね。そのエネルギーの大きさをマグニチュード6とか7とか言います。そして、そこからどれくらいの距離があるかによって震度、揺れが5とか4とかということになるわけです。マグニチュードが大きいからといって即、震度が大きいとは限らないのです。ハビーで語り継ぐ会を2回ほどした時に、京都大学地震研究所の林春男先生に来ていただきました。その林春男先生は、地震災害には素因と誘因がある、とおっしゃっています。原因、そもそもの元のものがある。そしてそれを誘発する原因というものがある。素因と誘因というものがあるんだ、と。

素因というのは、その災害に対する当該社会、われわれの社会の脆弱さのことです。例えば、どこで手抜きをしたのか、予算不足だったのか知りませんが、公立病院がべちゃんこになるとか、高速道路がひっくり返ってしまうとか、信じ難いことが起こったわけですが、こういう脆弱性ですね。社会の脆弱性。それが素因としてあらかじめあって、その脆弱性に対して誘因として外部の力が加わる、きっかけになる。つまり、海洋プレートと大陸プレートがぶつかりあって大陸プレートが引きずり込まれ、大陸側の岩盤がどこかで跳ね返って地震が起こる。そして揺れが起こる。その揺れに対して耐えられない時にのみ災害が起こる。だから、地震は避けられませんが、しっかりとした建物、しっかりとした鉄道、しっかりした道路であれば、つまり社会が強固であれば、災害は極端に言えば起こらない。地震が起こっても災害は起こらない。

阪神・淡路大震災においては、例えば阪急電鉄の伊丹駅や阪神電車などが大きな災害を引き起こしました。神戸市役所の旧館が崩落し、病院のフロアーもべちゃんこになりました。阪神間の新興住宅開発地域では30所帯が生き埋めになりました。今から考えれば、そもそも住宅開発を許可したこと自体が問題だったのかもしれませんが。考えようによっては、災害の素因たる社会の脆弱性は、人災なのかもしれません。

【災害の「抑止力」「軽減力・対応力」「的確な復旧・復興」】

東京大学に目黒公朗とおっしゃる先生がおられます。その目黒先生は地震災害に対する総合的な防災力は3つあるとおっしゃっています。1つは、被害の抑止力です。脆弱性を打破した状態、打破する状態を被害の抑止力という。2つ目は、被害の軽減力および対応力。被害をいかに軽くするか、いかに対応するかということ。3つ目は、いかに適切かつ有効な、的確な復旧・復興を行うかということ。この3つが総合的な防災力であると述べられています。また、次のようなことも述べられています。

なんといっても抑止力が大事です。ソフトというのはハードが確保されなければ機能し得ないのです。阪神淡路大震災の例で言えば、24万棟の建物が大破したわけですね。建物が甚大な被害を蒙り、その結果、死者6,340人。うち、発災直後に5,500人が亡くなりました。その人たちの92%の方が15分間ぐらいの間に亡くなっているのです。この発災直後に亡くなった5,500人の人々は、まさに被害の抑止力がなかった。つまり、建物が壊れたことによる死因の人たちが大半でした。朝の早い時間でしたから外に出ている人が少なかった。建物の中にいたということで

すね。

時間が経つにつれて起こる問題、例えば仮設住宅の問題、ごみ処理の問題、孤独死の問題に至るまで、それらは被害抑止力が弱すぎたことに起因する。すべて1番目の被害抑止力がしっかりしてなければ、被害は甚大になる。

また、地震防災上の問題点としては不適格な既存建造物が問題である。今後の建物は建築法で規制をかけることができるけれども、既に建っている建物に関しては如何ともしがたいので、非常に問題です。

〔400年で最大の被害を出した関東大震災〕

日本は、今、明らかに地震活動の度合いが高まっているということは誰もが認識しているところだと思います。約30年間の間に起こる地震で受ける被害は300兆円になるであろうと言われています。これを1年あたりに計算すると10兆円です。この10兆円という金額は実は阪神・淡路大震災の被害額です。それほど阪神大震災は大きな被害を受けているということです。

ここで関東大震災の数字を申し上げておきたいと思います。関係資料によりますと、関東大震災は相模湾が震源で、マグニチュード7.9の地震でした。マグニチュードというのは、6とか7とか8とか言いますが、1違うとエネルギーの大きさが30倍違うんだそうです。単なる1目盛りではない。この地震は海の溝と書いて海溝型といわれています。死者の数は142,807人となっています。なんと阪神大震災の20数倍ですね。全壊した家屋が128,206棟、半壊が126,233棟、焼けた家がなんと447,128軒。流失家屋が868軒。関東大震災の時、かなり津波が起こりました。例えば静岡県熱海では12メートルの高さになったという記録があります。火災は130カ所くらいから火の手が上がって、3日3晩燃え続けたということです。この400年間の中で10回ほど大きな地震が起こっているのですが、その中で関東大震災の被害は史上最大です。ちなみに阪神大震災の死者の数は10番目です。関東大震災がいかにもすさまじい地震であったかということです。

〔東海大地震はいつ起きても不思議ではない〕

東海、静岡県の沖のほうで起こるだろうと言われている所は、「空白地域」と言われています。本当は1923年の関東大震災、1944年の南海地震あたりで起こっていても不思議ではないのに、「空白地域」と言われる所はエネルギーが蓄積されたまま地震が起こっていない地域です。だからきっと大きな地震が来るであろうと言われるわけです。しかも、それは、今日かも明日かもしれない。いつ起こっても不思議ではない。不気味な限りです。

〔地震に対するイメージーションを持つとう〕

目黒先生は、政府も、行政マンも政治家も、エンジニアも、国民も地震に対するイメージーションを持っていないことが問題であると指摘されています。

イメージーションを持てといっても、どのようにして持つかは現実には難しいことです。そこで、目黒先生はフォーマットを用意して「この

フォーマットに書き込んでいってください。今ここで地震が起こったらあなたはどうしますか」と呼びかけておられます。地震発生は家の中か、電車の中か、歩いている時か、夜か昼か朝か、など。地震発生の時間とか場所、状態を想定して書き込む。そして、その5分後はどうするのか、10分後はどうするのか、想像しながらペーパーに書き込んでいってください、と。こうした試みを実行されています。併せて、次のようなことを主張されています。

イマジネーションを持つ人を1人でも増やすことがわれわれの大事なテーマである。つまりセルフディフェンス、自己防御していくためには、自分ひとりがものを考えていても仕方がないわけで、一人でも多くの人がイマジネーションを持てるように努力していこうではないか。

地震を最小化する原因を分析したら、行動しようじゃないか。例えば政治力が足りないのであれば政治力を持てばよい。経済的な問題ならその対策をやればよいじゃないか、制度に問題があるなら何とか対策しようよ、そういう意識改革が必要なのだ。そして、私たちはどんな仕事をしていても、市民としての立場から地震の研究者たちに社会に通じる言葉で情報を発信し続けようじゃないか、と。

[私からの7つの提言]

最後に、私からいくつかの提言をさせていただきます。

第1に、地震災害の問題では、家を補強する対策をやらなければいけません。新潟地震は死者の数が少なくて幸いでした。都市型の地震は大変なことになると思います。障害者の場合は障害者であるがゆえにこそ、もっと補強がいるということです。そのことを皆で知恵を出して主張していくことが大切です。

第2に、お互いに助け合うネットワークを構築しておく。それはコミュニティのネットワークと広域のネットワークを組み合わせたものです。阪神・淡路大震災の時も、施設で働いている人で「支援活動に行きたい、神戸に行きたい」と考えた人がいました。ところが上司の人がダメだと言った。「どうしても行くなら首を覚悟で行け」と言われて、結果的にその人は神戸に出発することを決意しました。部下がぞろぞろついて行ったので上司も首にはできなかったという話。これは本当にあった話なんです。これは何を意味しているかと言いますと、一般的には責任者というのは二次災害を警戒します。また、自分たちがやっている仕事があるのですから、そのノルマの問題がある、業績の問題がある。期限の決まった期日に納品しなければならないなど悩みは尽きません。支援活動の必要性は十分承知しながら出かけることができない。部下を派遣できない。いろんなことがあるわけですね。だからこそ日常の中でネットワークを構築して有事の時にはお互いに助け合いましょう。そしてその時の責任者は、判を押しても決済をしてもその人の責任にならないような知恵を予め皆で出して、相互協力のネットワークを構築しておく必要があるということですね。

第3に、視覚障害者専用の二次避難所が必要であるということ。

第4に、情報機関の大切さを認識するということ。日常的に情報に携わっている人たちの役割も大変大きいということです。例えば、今日おいでになっておられる点字毎日さんとか、NHKさんとか、そこにJBSも加えて欲しいのですが。やはりこういう時には、日常的に情報に携わる仕事をしている人が必要です。情報を扱うということは思っているほど簡単ではありません。ハビーが支援活動できたのも、日本ライトハウスの職員が活動できたのも、JBSという、情報を日常的にフリーに扱うところがあったからできたわけですね。

第5に、安否確認のためのリストの問題です。これは阪神大震災でも行政にリストを出せ、出さないとかいろいろありました。これは結論的に私個人の意見を申し上げますと、行政にリストを求めるのは止めたほうがよいと思います。これはいろいろ賛否両論があらうかと思いますが、提言だけにとどめておきます。

第6に、災害時、発災時には行政への依存はできないということです。行政は地震対策だけのためにあるのではないので、たまたま起こる地震や非常事態には即応できない、なかなか力を発揮できない。だから日常の中で、例えば住宅の補強費を補助してください。そういう制度を整備してくださいとか、あるいは盲学校や国立視力障害センター、ライトハウス、千山荘など、そういった施設が視覚障害者の二次避難所として使えるように、日常の中で行政と話し合いをして、その時はどうか、搬送の方法をどうするか、費用は誰が負担するかといったことを日常の中で行政を巻き込んで相談しておかなければならない。発災直後は行政を頼ってはいけない、ということですね。腹が立つだけです。

これが最後になりますが、「セルフディフェンス」。結局、自分がしっかりしていないと助からないよということです。とにかく命があれば後は支援を待つことができる。そのためには基本的なこととして家をしっかりしておくということです。そして、自分だけでなく、防災の問題を考えるなら社会そのものを考えなければどうにも解決にはならないということですね。社会の脆弱性を打破しておく必要がある。つまり抑止力のある社会を構築する必要がある。だから、私たちは社会の構築の仕方、社会への参加の仕方を、社会の在りようを日常の中で明確に意識する必要があると思います。

セルフディフェンスを進めるためには、やはり行動し続けることだろうと思いますね。語り続けること、シンポジウムを行ったり、災害のグッズ展をやったり、あらゆる行動を起こしながら、持続する志を持ってイマジネーションを構築できる人、イマジネーションを持てる人と仲間を増やしていく。そして災害抑止力のある社会を構築していくことが必要ではないか。そのように思います。

ここまでにさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」（阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録）

基調報告 「視覚障害被災者1000人アンケートから」

久保 明 夫 氏
元・視覚障害者避難調査委員会委員
現・国立神戸視力障害センター 指導課主任

国立視力障害センターの久保と申します。よろしくお願いいたします。

「視覚障害被災者1000人アンケート」

今日のテーマである「視覚障害被災者1000人アンケート」というのは、震災のちょうど6ヶ月後に行いました。8月の半ばから9月の最初、初旬まででした。ボランティアの方、被災者の方、当事者の方のご協力を得て調査を行いました。その時の名簿は、盲学校、視力センター、地域の盲人協会等の方のご協力を得て、約1,000名強の名簿をいただきました。電話も含みますが、訪問調査を主体として693名の方に、被災当時視覚障害の方がどういうことでお困りになったとか、どういう方法で避難したのか、あるいはその時いろいろ困ったということ进行调查して、今後の対策の方針を出そうということで急遽チームをつくりました。

実は、調査の時には、ハビのボランティアの方に非常にお世話になりました。当時こちらの現地の方は、具体的な対策に大変ではないかということで、調査の計画や調査票の作成は国立リハビリテーションセンターの方で行いました。その時調査にご協力いただいた方々も今日ここにいられていると思いますが、あらためて感謝申し上げたいと思います。その時の調査票は今日の資料のいちばん後ろに掲載されています。それから資料の7ページから11ページまでは、調査の概略と簡単な状況載せています。あとでご覧になっていただければと思います。

「トイレに困った・風呂の情報が役に立った」

アンケートの中から特徴的なこととお話します。やはり、「トイレに困った」という方が結構多かったと思います。次に、「役に立った情報は何か」というとお風呂ですね。お風呂の情報が役に立ったということです。当然食えることとか住むところの情報も役に立ったということですが、お風呂の情報がパーセンテージとしては一番高い。

次に、「セルフディフェンス」という考え方が紹介されましたが、震災に遇われた方が「震災前から避難場所を知っていたか」という問いに対しては、「知らなかった」方が60%くらい。「地域と提携して避難訓練したことがあるか」という問いに対しては、「避難訓練をした」人はわずか5%でした。

「近隣との日頃のつきあいが大切」

日頃の近隣の方とのお付き合いの方法なり、程度が、10年前の震災の時にも役に立っていたようです。「日頃から挨拶程度の付き合いだっ

た」方が46%。「配慮してもらえるようお願いをしていた」という方が37%ほど。これは必要なことだと思います。「特に近隣の方とはお付き合いがなかった」という方が8%ということで、何らかの形で近隣とのつきあいが役に立っていたと思われます。さらに突っ込んで「近所の方は皆さんの障害について知っていたか」という質問をしたところ、「知っていた」という方が86%おられた。これも大切なことだと思います。

[被災者自らが語ることの大切さ]

実は、私はこの調査チームを組んだ時は埼玉の国立リハビリテーションセンターにいまして、昨年神戸に転勤で来たわけです。私は以前からJRPS（日本網膜色素変性症協会）という患者の会の設立に携わっていまして、震災前にも灘区の東部在宅障害者福祉センターでいろいろ集まりをやってきておりました。それから震災直後は調査で神戸にきて、また復興した後も東部在宅障害者福祉センターで集まりをした覚えがあります。そんなわけで、神戸市内の状況と被災者の生活の復興の経過は把握しているつもりですが、今日午前中の話を聞きまして、被災された方しか分からない恐怖とか、その中から徐々に落ち着きを取り戻していく、自分の生活を取り戻していく貴重な体験を話されました。これはほんとうに大切なことだと思います。

[震災の時の国立リハビリテーションセンターの対応]

当時、国立リハビリテーションセンターでは1月20日ごろ、医療班を現地へ派遣しました。それは視覚障害の方のためということでなく、避難所の被災された方のけがとか病気のケアをするためです。当時の記録を見ますと風邪が多かったですね。1月20日過ぎから3月一杯まで各地の被災地に入っていました。このように医療班を作って対応しています。

[広域の相互支援体制を確立しておくこと]

当時、神戸視力障害センターは二次避難場所として視覚障害の方が20数名利用されています。ただここが問題なのですが、発災直後は利用できない状況でした。センターもライフラインが寸断されていますので避難しようがないという状況がありました。国立施設の場合は、北海道から九州まで全国に数箇所のセンターがありますので、このような場合には他のセンターが二次避難場所になるということがあっていいのではないのでしょうか。

これだけ広域な地震であれば、行政も一般住民も全部が被災者になってしまいます。ですから同じ地域の中でいくら支援体制を作っても緊急の対応は多分できないと思います。大切なのは姉妹都市提携のような形で、むしろ遠く離れたところの関東と関西といったようにブロックに分けて支援体制を組む必要があるのではないかと。例えば神戸で震災があった場合、震災だけでなく、台風や災害があった場合も、例えば埼玉の方の市町と提携を結んでおいて、お互いに非常時に物流できるような状態を作っておくということです。実は、大宮市では同じ県内の別の市と提携をして、サッカースタジアムの地下に支援物資の備蓄をしています。

これが今回の新潟の時にも役に立ったですね。行政は広域的なこと、そして、発生直後よりも後の対応についてやっていくのがいいと思います。

【まとめの提言】

1000人の方のアンケート結果から得られた教訓の中からいくつか提言したいと思います。

〈近隣とのネットワークをもつこと〉

その1つは、震災の初期には地元の方、近隣の方とのネットワークが大切だということ。行政の対応は11日目以降からでてくる。それまでは、まず近所の方の声かけが一番役に立っています。

〈避難場所の周知と日頃の訓練〉

2つ目は、避難場所についても周知していく必要があると思います。特に視覚障害の方の場合は、瓦礫など道路上の変化によって歩きにくくなりますので、避難場所は学校だよという頭だけの知識ではなくて、実際、何度か避難所まで歩いてみるという訓練も必要になってくると思います。これはセルフディフェンスとして、地域の避難訓練の日でなくても、ちょっと時間のある時にボランティアやご家族の方とご一緒に避難場所まで行ってみるといいですね。そういうことをぜひ心がけられたらと思います。

〈情報入手のルートの確立を〉

3つ目は、川越さんも言っておられました情報入手の問題です。実際にどこにどういう方がいるのか、そういう情報の入手はプライベートなこともありますので難しいですが、そのルートをいろいろ広げていかねばならないということです。

〈視覚障害者の二次避難場所の確保を〉

4つ目は、視覚障害者の二次避難場所の確保が必要だということ。今、行政の障害者福祉施策は統合という方向に動いています。しかし、視覚障害の方に携わっている専門職の1人として、私は災害時においては、視覚障害の人だからこそ専門性が必要なのだと考えます。例えば、理学療法士の方は、白い杖の使い方を知っている人もいますが、殆どの方がご存じではない。彼らは機能回復訓練の専門職ですので、皆さん方が歩くということについては、また別なアプローチが必要なんですね。

そういう意味で、視覚障害という障害を配慮した支援システムと場所の確保が必要ということです。例えば避難所でのトイレの問題があります。プールから汲んだバケツが置いてあるだけでは、そのバケツはどこにあるのか、場所すら分からない。それをどのように使えばよいのかなど、視覚障害という特徴を配慮した体制を日頃から考えていくことが大切です。

〈避難所での情報伝達に工夫を〉

5つ目は、避難所での情報伝達がどうも困ったという方が多かった。

食料や日用品の分配などの情報は、掲示板とか、ちょこっとアナウンスされるだけで周知されない。ですからテープで始終同じような情報を流しておくとか、スピーカーによる情報伝達を貼り紙だけでなくてやるとかですね。視覚障害者には、その辺の配慮が必要ということです。

1000人アンケートは貴重なデータがいっぱいあるのですが、時間の都合で端折ってポイントだけを申し上げました。今日はどうもありがとうございました。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」(阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録)

第4章 パネルディスカッション 「語り継ごう、震災体験」

会)	パネリスト	川越利信 氏 (JBS日本福祉放送)
		近藤敏郎 氏 (神戸市視力障害者福祉協
会)		浮田 伸 氏 (KOBEBふれあいの会)
		中村 透 氏 (日本盲導犬協会)
会)	特別参加	松永秀夫 氏 (新潟県視覚障害者福祉協
	コーディネーター	新阜義弘 氏 (神戸アイライト協会)

[パネラーの自己紹介と震災時の状況]

(新阜) 皆さん、どうもお疲れさまです。ただいまからパネルディスカッションを行います。午前中の5名の被災者のお話や川越さんと久保さんのお話を聞いても、当時のことがすごく思い出されてきますね。10年の時の流れが非常に短く感じます。今日は新潟からも松永さんが来られています。後ほど新潟の報告もしていただきたいと思います。川越さんは先ほどお話ししていただきましたので、川越さん以外の方のパネリストに、震災についての考え方について、自己紹介を含めて5分程度でお願いしたいと思います。それでは、近藤さんからお願いいたします。

[普段からの近隣との交流と安心して避難できる場所をもつ]

(近藤) 神戸市視力障害者福祉協会の会長をいたしています近藤敏郎でございます。皆さん、話を聞いてお疲れになって、少し眠たいなと思っておられる方もあろうかと思われそうですけれど、どうぞ我慢してください。私がまだ小さかった2~3歳の頃ですが、人がもっとも怖がるものの代表として、地震・雷・火事・親父、そういう歌がはやったのです。これを言いますと皆さん方、私の年齢を大体お分かりいただけることと、それから私が大きくなってからこういうふうな歌謡曲の指導をしていた理由も分かっていたのではないかと思います。とにかく私はそういう歌が巷にはやっていた頃に生まれたんですけれども、本当に阪神大震災になるまでは、なぜ地震が怖いんだろうかというくらいに思っていました。それくらいにしか思っていなかったんですね。なぜ怖いものの中で一番に地震があげられているのか。そして火事というのもあります。阪神大震災では火事による被害もかなりありましたから、もうそれは確実に今までの私の考えが間違っていたことがわかりまして、確かにこれは怖いものの第1番

であったなあということを知らされたのかなと思っています。

あの地震は最初に縦揺れがありましたけれど、それがもう一回あったり、22秒といわれた時間がもう少し長かったりしたら、おそらくうちの家も駄目になっていたり、私たちも生きていたかどうか分からないほどで、それを思いますと今でも背筋が寒くなります。

地震の時に、私はまだ神戸市の会長をいたしていませんで、神戸市の中にあります兵庫区で視力障害者福祉協会の会長をいたしておりました。そういう関係で、まず地元の視覚障害者、言えば会員たちの動向を1週間くらいの間に把握しようと思ひまして。役員の方々にもお願いして、だいたい100名近く会員がいましたが、1週間ぐらいでその方々の動向を知ることができました。安否確認といひましようか。親戚の家のほうへ行かれた方、あるいは避難所に行っておられる方、等いろいろ状態はありましたけれど、まず亡くなられた方がなかった、会員は全員無事であったという、家は別として、そういうことで、まずほっといたしました。

私の家は半壊に近い一部破損でしたけれども、その家にも近所の会員が1人、2週間ぐらい寝泊りをして一緒に生活いたしました。こんなことで状況はさまざまでしたけれども、あとから聞いたところによりますと、神戸市内では視覚障害者とかその家族たちが約20名くらいも亡くなっていたということを知りました。その経験から私は2つのことを申し上げたいのですが、近所の人との交流ということが1つですね。詳しいことはお話できません、時間の余裕がありませんけれども、近所の人との交流が絶えずあるかどうか。それからもう1つは先ほどからも言われています視覚障害者が安心して避難できるところ、また安心して普段から付き合っていけるような交流の場というのを視覚障害者の方は必ず持つておく必要があるのではないかという、この2つのことを思ひました。それから最近の新潟地震について、考え直さねばならないことがあると思ひました。今、私たち阪神大震災の頃より経済問題とかあるいはその他いろいろな問題で、またみんなの心でもありますね、かなり、どういっていいでしょうか、荒くなってきているというのか、ちょっと乱れてきているということで、弱いものとか、そういう人をいじめても当たり前というような感じになってきています。そういう方々が多い中で、今後、災害に備えて私たちが対応していくうえに、そのことも忘れてはいけないのではないかと考えています。

(新阜) ありがとうございました。続いて中村さんお願いします。

[10年前、大災害の被災地神戸に入った経験から]

(中村) 日本盲導犬協会の中村と申します。今朝、神奈川のほうか

らやってまいりました。私のレジメの方に、なぜ私がここに
いるのかということについて多少書かせていただいています。
震災が起こった当時はですね、日本ライトハウス大阪に
いまして、養成部で勤務していました。私が日本ライトハウ
スに入ったのはちょうど10年前のことです。大阪に4月に来
て、翌年の1月に震災が起こったので、当時はライトハウスで
は新人でございまして、まだ責任のある仕事はまかされてお
りませんでした。震災が起こった直後、テレビのニュースで
外国人の方が支援物資をボランティアで仕分けをしていらっ
しやる映像が映ったんです。私、ライトハウスでかなり暇を
していて、暇をしているといったらおかしいですが、こんな
ことをやってないで、ちょっと隣のところにボランティアで
も行きたいなという気持ちを持ったのですね。それで先ほど
話に出た川越さんがおやりになったハビーという団体に4日後
ぐらいに行きました。防災意識の非常に高い人間でもないで
すし、防災の専門家でもありませんので、最初は気軽に行っ
たというのが正直なところですよ。視覚障害の人をターゲット
に何かをするなどということを考えること自体、私の発想に
は全くなかったですね。

聞いたところによりますと、震災が起こった直後に川越さ
んが、大阪から自転車で西宮まで真っ暗な中を自転車をこい
で入っていったという話で、帰ってきてこれは大変なことだ
からとにかく何かしなければならぬ、ということでハビー
を立ち上げたい。私が参加した時には大阪の盲人情報文
化センターの一角にあるJBSというところの会議室みたいな部
屋に数人が集まりまして、さて何をしようかというところ
で、とにかくおまえバイクに乗っているみたいだから現地に
行って来い、ということになって、長田までバイクで行きま
した。この腕章を付けて行けと言われ、腕にJBS報道という腕
章を付けてバイクで入りました。2号線が通行止めになってい
たんですが、フリーで通れたんですね。一般道を通っていたら、
長田に入るまでにたぶん5時間以上は要していたと思うの
ですが、1時間ほどで長田に着きました。2号線はですね、大
阪から始まって尼崎・西宮・灘、その前に芦屋ですかね。そ
れから神戸市内に入っていく。大阪市内のコンビニでお水と
アンパン2個を買ってリュックに入れて走りました。尼崎は道
路沿いの家が少し傾いている、あるいは瓦が落ちているとい
う状態。西宮に入ったらスーパーの2階部分がぐしゃっと潰
れて歩道にガラスが散乱している状態。灘に入ったら街が黒
くなっている。灘に入ったあとぐらいから、ちょっと言葉に
なくなってきたというか、今もだいぶ興奮してきました
けど、何を考えているのかさっぱり自分では分からない状態
になって、とりあえず周りを見ないでずうっと長田まで行き
ました。

長田の駅前是一片真っ黒でした。臭いがすごかったのを覚
えています。その臭いというのは焦げた臭い、それから人の

臭い、ガス臭さ、こういったのが充満をしていました。空にはヘリコプターがたくさん飛んでいました。街を歩いている人は皆ヘルメットをかぶって髪を振り乱していました。上を向いている人はいなくて、殆どの人が下を向いて歩いていました。そして、自衛隊の人がスコップを持っていっぱい歩いていました。こういう光景は、テレビとかで見たことはあるのですが、実物は全然見たことがなくて、とにかく興奮をしたことを覚えています。

長田の区役所に行かなきゃいけないということで区役所に行きました。その長田の区役所は避難所になっていました。今でも忘れないのですが、入った瞬間、ものすごく異様な臭いがしました。その異様な臭いを放っているのは、すぐ脇にあった安置所というふうに書いてあったところと、それからトイレですね。床と階段には人がいっぱい物資と一緒に寝ていました。歩けるスペースはどこの避難所もほとんど同じような感じで、50センチほどの幅のところを歩いて障害福祉課というところにやってきました。奥のほうで数人が何かしゃべっているの、そこで声をかけて実はハビーという団体ができたので、このポスターを避難所に配っていただけませんか、あるいは貼っていただけませんかというのが私の最初の仕事でした。川越さんからは、神戸視力障害者福祉協会のビルが危ないので、そこで泊まってはいけないとのことでした。シュラフを持って行って泊まりたかったのですが、泊まっちゃ駄目だということで、それから毎日、大阪のJBSで仮眠をして、朝出て神戸で活動して、情報を収集して大阪に帰って、それから情報を全部コンピュータに入力して整理をして、次の日何をやるか考えて、仮眠をして、また朝、神戸へ行くということを1週間ほどやりました。

最初は自分が何ができるかさっぱりわからないままやっていたのですが、避難所から連絡がぼつぼつ入るようになって来ました。毎朝、視力障害者福祉協会のビルの前には数十名のボランティアの方が待っているのですね。何名来るかわからないボランティアの方に仕事を振り分けて、連絡を待つという日々だったのですが、ぼつぼつ情報が入ってくるようになりました。視覚障害の方が避難所にいらっしゃって、そこでの生活はままならないというのはすぐに想像できましたので、どっかへ避難させなければいけないということで、避難先を確保しようと情報を収集しました。それは川越さんのほうでやっていただいたのですが、これがなかなか見つからなかった。周辺の施設が「来ていいよ」とすぐ言わなかったんです。唯一言ったのが千山荘さんで、とにかく千山荘さんに避難をしたいという人をどんどん送り込みました。大阪のライトハウスもやっと少し経ってから「うちのところに来ていいよ」となったので避難をさせていただくことにしました。

一番最初に大阪へ避難した50代の男性は、何時間もかけて神戸から避難をされて、JBSの事務所に着いた時に大崩をして

大泣きをされました。それほど震災というのはすごかったのだなというふうに思いましたし、今もそういうふうに思っています。私が体験した震災というのはそこから始まって、あと視覚障害の方が復興された街で歩くのに不便されないようにということで歩行訓練をしたり、そういったことを5月の連休ごろに仲間と一緒にやりました。今回のこのイベントの話をお伺いして「いいですよ」というふうにお引き受けしたあとで、この間の新潟の中越地震があり、何かしなきゃいけないかなと、ずーっと思っていたんですが、やっと一週間ぐらいに、これはやっぱり現地に行かなければいけないというふうに思いまして、行ってまいりました。幸い、と言っているかどうか分かりませんが、お亡くなりになられた方が阪神大震災と比べ物にならないほど少ない被害で済んだということとは幸いでした。新潟のほうは家の被害とか、そういったものは非常に大きかったのですが避難所の人の顔とかそういったものは、それほど悲惨なものでなかったです。10年経ちましてボランティアの支援組織はどうなったかと言いますと、私の時は携帯電話1本、あるいは避難所に歩いて行って情報を持ち帰り、手書きの文字を大阪に持って行ってコンピュータのデータベースに入れるということをやりました。新潟中越地震の場合は、私が入る前に、既にどこの避難所に何人ぐらい避難されている方がいて、支援物資がこうなっていて、要求されているニーズはこうだというのが、全てホームページで公開をされていました。現地に行ってそのシステム作りに合っているのは非常に感心しました。情報も豊かでした。

私が新潟に行って訪れたのは長岡と小千谷と十日町ですが、小千谷の障害福祉課に入ったときに、行政の方がおっしゃっていたのは「私たちは何もできません」ということでした。これは神戸のときと実は変わっていない。私が言いたいことは、自分の命は自分で守るしかないというのがまず第一です。それから、2週間ほど避難所で生活をするという状況を想定しておいたほうがいいだろうということ。それから3週間以降についても、どういうふうに過ごすかということを考えておいたほうがいいだろうということが、唯一私が体験したというか、見てきて皆さんに申し上げられることかなというふうに思っています。ちょっと話が長くなりましたが、以上です。

(新阜) ありがとうございました。たくさん思いを語りたいと思いますが、これから後の討議の展開に期待しましょう。では浮田さんお願いします。

[大災害の時の消防ができたこと、できなかったこと]

(浮田) 打ち合わせ通りしたいと思うのですがよろしくお願いします

す。私、K O B E ふれあいの会と申します。訪問介護とか訪問入浴やっているNPO法人の理事をしています、浮田と申します。本職は神戸市の消防職員なんです。神戸の地震のときには真っ只中におったメンバーで、被災者の方々から行政は当てにならん当てにならんとずっと言われ続けていまして、非常に肩身の狭い思いでここにおるわけなんです、今日は勉強だと思います。阪神大震災の時、火事が起こりましたね。近藤さんも言われましたね。火事がたくさんあったということ。ほんとにたくさん火事がありまして、震災が起こった時からわずか3日間で5,000平米以上燃える火事というのが22件神戸市内でありました。5,000平米といたらよく分からないのですが、すごい大きな火事です。そんな大きな火事がたかだか3日間の間に22件も発生しているのです。この火事で亡くなった方というのは全部で530名ほどで、その中に半数以上、65歳以上の高齢者の方がいらっしゃる。自分が特に高齢者なんかに対するボランティア活動をしているものですから、それがよく気付くんですけれど、半分以上の方が高齢者の方なんです。さらに高齢者の中でも、亡くなられた3分の2が女性です。それから考えてみると震災で亡くなった方というのは本当に災害弱者と言われる方ですね。少なくとも女性の方が亡くなる可能性が非常に高いのが、現実表れているんじゃないかと思うんです。

私は行政一般の消防署職員なんですけれど、なぜ消防が役に立たなかったかといいますと、皆さん方ご存知のように、5,000名以上の方が亡くなられて、助かった人はもっといますね。いろんな方がたずさわってきたんですが、その中で行政がどれだけ助けたか。消防署というのは人を助けるプロです。中越地震でも東京消防庁のハイパーレスキュー隊が幼い子供を助け出し、日本国中、ずーっとテレビで放送されていましたね。消防のハイパーレスキューなどカッコいいななどよく言われるのですけれど、残念ながら神戸にはまだ入っていません。本当はそんな助けをするのが役目なんですけれども、特に阪神大震災では消防職員に助けられたあるいは警察官に助けられた、行政によって助けられたというのは本当に僅かな方じゃないかと思うんです。多くは近隣の方々に助けられたんじゃないかと思います。

それで先ほどの火事に戻りますが、火事がたくさん起こって、5,000平米を超える火事がいっぺんに神戸市で起こったのです。神戸市内に消防署というのは10いくつあるんですけれど、各区に消防署がありまして、その中に消防職員が毎晩泊まっていますが、その数はだいたい100人くらいですね。私は東灘の消防署で勤務していますが、30人くらいで、東灘区の人を火災から救助しています。火事があったら消防車が走り回っているのをよく皆さん目にすると思うんです。いろんなところから応援が来ますから、消防自動車がたくさん来るような気がするのですが、東灘だけで考えましたら、火を消

す係りの消防車は4台しかないんです。東灘だけでもたくさん火事がそのときありましたね。ですから大きな火事の現場に消防自動車は1台だけ、もしくは全然行っていないところがいっぱいあったんじゃないかと思います。

私自身は実際は体験していないんですけど、たくさんの消防隊員が非常に残念な経験をしています。火事が起こった時、われわれのポンプというのは水が必要なのですね。ポンプ自動車があっても水がなければ火事は消せないのに、この水が遮断してしまっていたのです。貯水池、消火栓、水道管が破裂してしまっていて消火栓から水が採れないので、学校のプールなんかから採って火事を消していたわけなんですけれど、プールなんていうのは限りがありますから、すぐに水が無くなっちゃうんですね。そのプールへ消防自動車をつけて水をかけて消そうとしていたのですが、火の勢いが強い、消防自動車がたった1台だけ、職員が3名か4名しかいない。しかも隊員はあちらこちらに分散しているものですから、自分の目の前で対応できるのは自分1人しかいないという災害がたくさんありました。

ある隊員が、僅かに水をホースを持って鎮火して行ったのです。その目の前に助けを求める人がいたんですね。火がだんだん迫ってきよんです。水がなくなってくる。その人を助け出すにも、なんにも道具がない。スコップ1本あるだけです。その人を助け出すことができない。その人は隊員に「もう私のことはほっといてあなたが逃げなさい」と言ったそうです。あなたまで巻き添えになるから逃げなさいと言われて、本当に目の前に炎が迫っているものだから、助けたいけれどもどうしようもなく「待って。すぐ来るから」という言葉を残してその場を立ち去ったそうです。こんな思いをしたものが消防署にはたくさんいるのですけれども、いまだにこのことが脳裏をよぎってしまって、本当にやりきれないと思うのでしょうか、大規模自然災害、予測することができる範囲を越えた災害がたくさんあります。

何が言いたいかといえば、今までたくさん言われてきたのですが、こういう大きな震災の場合には「行政が役に立たへん」とよくいわれるのですけれど、特に消防署の場合、大きな災害を防ぐには1人や2人ではとてもできないことなんです。ですから周りの、先ほども言われたのですけれど、近くの方のご協力を得るということ。それが1番大事やないかと思います。近隣の方のご協力を得て助けたい。もちろん消防署も助けます。救助に行きます。火事も消します。だけど一番最初にできるのは、やっぱり近隣の方ではないかと思います。

[障害者には二次的避難所が必要だ]

(浮田)　ですから近隣の方とどういう協力関係を作りあげていくか

というのが、これからの大きな課題だと思っております。いろんなところで自主防災組織というのができていて、消防署の関係でそういう自主防災組織に参加しておりますけれど、自主防災組織が十分機能しているかといえなかなかそうもいかないところもあるんです。ですからそういう意味では、助かるためには、自分自身から情報を発信して、私はここにおるんですよということを言うていただかなかつたら助けられないんじゃないかという気がします。近藤さんが助けられた時に、近所の方が大声出してしゃべってくれた、声をかけてくれたことが感激したということを書かれていますけれど、本当にそのとおりやないかと思うんです。

消防署でもそういうことを経験しましたし、それから自分の活動で、ボランティアで訪問入浴とか高齢者の方の入浴サービスをやっているんですが、2月からその活動を再開しました。やっぱり半月以上は活動ができなかったんです。2月から活動を再開しました。そのとき利用者の方からいろいろ話を聞きましたら、避難所では避難できない。特に高齢者で寝たきりの方には、何とか家族の方に1人だけ避難所へ連れて行ってもらい、場所を確保してそこで寝てもらっていたんです。でも、トイレに連れて行って帰ってきたらもうその場所がなかった、とか、人目のつかないところでおしめを換えようと若干違う場所へ行ったら、また帰ってきたらその場所がなかったという声も出ました。人の目を気にしないで排泄する場所、もちろん一般の方もそうだったと思うんですけれど、特におしめをされている方には排泄の行為が十分できなくて困ってしまったと言われていました。ですから、自分の活動の経験から言うならば、やっぱり避難所へまず逃げるんですけれども、その次の避難所ですね、二次的な避難所というのが障害を持つ方、特に災害弱者といわれる方には必要なんじゃないかと。一般の人と同じ避難所にいるということは、非常にストレスが溜まってしまうので、早くそういう二次的な避難所を作り上げて欲しい気がするのです。なかなかできないのが現状だと思うんですが、そういうことを先ほどの話を通じて言わしていただきました。

私の活動の利用者の中で、避難所におった方はほんとうに僅かで、家がかかなり傾いていてもやっぱり家の中へ帰ったそうです。避難所では食べるものが困らなかったのですが、家へ帰ったら全くその救援物資がなくて、食べるものにも困ったと言われていました。そんな経験からやはり二次的な避難所がすぐに立ち上げるようなシステムを作っていかなければと感じました。以上です。

(新阜) ありがとうございます。千山荘は、たくさん視覚障害避難者を受けましたけれど、とても残念ですが、私は半分くらい断りました。上司には、どんどん受けなさいと言われたけれど、千山荘も被災していたし、職員も数名しかいない。私

と一緒に宿直していた職員が家に帰れたのは5日後ですよ。水もない、ガスもない、そういう状況でね、職員も被災していたから、いつ来るかわからない。千山荘は限界を越えて受けていたと思います。

さて、今日は新潟からわざわざ、視覚障害者福祉協会理事長の松永さんが来られています。ここで松永さんに新潟の現状をお話いただいて、そのあと視覚障害者の防災について展開していきます。松永さんどうぞ。

〔中越地震での視覚障害者の状況〕

(松永) この震災から10年、神戸から発信というイベントに参加させていただき、ありがとうございました。今お聞きしながら、これは新潟の地震の前にお聞きしたかったなというのが実感です。午前中の5人の方の話を聞きながら、今地域やわれわれ仲間の顔を思い浮かべていますと、大変だなと思っています。基調講演とかアンケートの結果も確かにそうだなと思っています。いただいた資料を見ながら「なるほどな」という、都会の地震と地域の地震、場所の違いはあるんだけど、基本的なことは同じだなと思っています。

あの地域には約1,500名の視覚障害者がおられます。ただ実際私たちが名前を確認できているのは200人無いと思っています。団体に入っていない方々とか、あるいは高齢者の方々がおられますので全部を把握しているわけでないのですが、その中でも極力電話等で確認していったわけですけど。正直なところなかなか安否確認ができず、最初どうなのかと心配していましたけれど、われわれの事務所からの分と各地区の会長からの分と、今は皆さん携帯を持っていますので、携帯電話を通じての仲間同士からの連絡もありました。それからメール等で入ってくるものもありましたので、時間は経ちましたけれど一応の確認ができました。

正直なところ人的被害がなかったことは良かったと思っていますし、半壊・全壊それぞれありますけれど、大きな被害を受けた方はそれほどなかったように思っています。ただ、それほど被害がなかったと思っていたのに実は被害が大きかったとか、全壊に近いと思っていたのにそうでもなかったというように、それぞれの実際の調査の結果が当初の思いとは少し違っているような感じがいたしました。

それと避難所のことですが、先ほど皆さんお話がありましたように、避難しなかった方々が実はおられました。避難所に行っても視覚障害者への対応がうまくいかないだろうから、行っても大変だろうから自分の家にいたとか、家の前の庭に寝ただとか、そういう方々が結構おられましたし、それからご親戚だとか、あるいは県外へ避難された方もおられます。そういう意味では、10年前の神戸の皆さんとは地域性の違うこととか、あるいは時代の違いもあるのでしょうか、対

応や状況が少しは違っているのは確かだと思っています。情報の伝達ということになると、聴覚障害者の方々からはどうしても、チラシを避難所に貼ってくれというのがでていましたけれど、視覚障害者は貼られても見えませんが、音声で案内してくださいとお願いしていたわけですが、正直なところどれだけ細かく行き届いたのか疑問点もあります。それと見えない聞こえない盲聾の人からの支援の依頼が私たち団体に来ました。その辺も考えていく必要があるだろうと、点字図書館の方で資料を作って、それを点訳ボランティアさんに点訳していただいてその方に送る、あるいは地域に点訳できる方が、その盲聾の方が点字を読めたわけですので、すぐ対応するように手配しました。障害が重なることは、災害に対する被害がどうしてもより大きいと言うのでしょうか、そういうふうになるような感じがしております。時間がないようですから、こんなことでよいでしょうか。

(新阜) ありがとうございました。川越さん、講演で抑止力のある社会づくりを、結論的に言われていましたけれど、今パネリストとか松永さんのお話を聞かれて、視覚障害者の防災のいろいろなこと、セルフディフェンスが基本でしょうが、ご意見ございませんか。

[視覚障害者の復興と防災への提言]

(川越) やっぱり、ずーっとつめて考えると、林先生がおっしゃる社会の脆弱性を何とかしなければならない。目黒先生のおっしゃる災害対応力、抑止力というところにいつてしまう。阪神大震災では、朝が早かったから自宅での犠牲者というのが全体の87パーセント。そしてその92パーセントが15分以内に死んでしまっている。端的に言えば建物がつぶれたら何をしても駄目なんですね。命を守るには、まず建物の問題に目を向けなければいけない、ということですね。焼け出された人たち、建物が壊れて逃げ出せなかった人たちが結構多いんですよ。兵庫県の検察医、監察医といった、死体を解剖したりするお医者さんに、写真を見せてもらう機会があったんです。建物なんかに圧迫されて、心臓から出た血液がまた戻ることができない人、煙を吞んで死んだ人、あるいは直接火にかかった人、いずれも建物がらみになっているのですね。

私は抑止力の問題として、予め建物の問題を考えることが重要で、視覚障害者の場合は例えば視覚障害者の団体が専門家と組んで、行政と話し合っただけで補強費、補修費などの制度をきちっと作った方がいいと思います。命がなければどうしようもないわけですね。そのことを強く言いたい。

[自分自身を守ることと公的支援]

(新阜) 社会基盤のことですね。近藤さん、川越さんから提言がありました。団体の長としてハード面の行政への働きかけとか、家屋の補修費とか、障害者の住宅についての要望とか、近藤さんの言われている近隣の人とのふれあいとか、行政も含めて公的支援の必要性や働きかけはいかがですか？

(近藤) まず団体として、川越さんが言われたように、自分で自分の命を守ることを徹底をしていきたい。団体としてもそのような教育というか、サポートというか、あるいは情報提供というか、そのことを絶えずしていかないとけない。まあ、その一つとしてはやはり伝言ダイヤル171とか、その活用のことですね。皆さんに知っておいていただきたい。そして自分の安否を皆に報告する。そして家族はその安否を声を通して、録音を通して聞くことができる、というふうなことを活用していきたいなと思っています。それから、ややもすると障害者は近所の人との関わりが非常に薄いですから、そのこともやはり自分たちで、近所の人たちに自分の存在を知らしておくこと。障害者がいるんだよというんじゃなくて、自分の存在を近所の人に分かってもらうなどPRを自分でしておくことがやっぱり大事ですね。団体の方としては、例えば行政との関わりということもあるでしょうけれど、先ほどからあまりその行政のことはよく読めておりませんけれど、まあ準備としてはやはりそんなことも必要なんじゃないかなと。

兵庫区の視力障害者同士の家庭の例ですけれど、地震が起きたら誰も来てくれない、心細い、家はどうなるんだろうか、それから食べ物がない。外へ出ようとするといないから出ないでほしいと、皆にとめられる。ガイドヘルパーも全然機能していない、このことが非常に困るなと思っています。ちょうどガイドヘルパーの事業所も立ち上げたわけですが、視力障害者の場合はことさらホームヘルパーとガイドヘルパーとが分からないくらい緊密になってきているわけですから、果たしてその方々にどの程度手助けをいただけるのかなということもこれからの課題としておきたいと思っています。

[人的支援の現状と課題]

(新阜) 近藤さんがヘルパーとの、人との関係を指摘されましたが、先ほど中村さんから、ボランティアの体制は、中越地震ではけっこう整備されてきているというような話がありましたね。実際ボランティアなどの支援体制について、専門家の立場から見て中村さん、どういう課題がありますか。

(中村) 災害が起こった時の、一次対応のボランティアの組織というのはいくらあるのじゃないかと。今現在でいえば、各地から本当にたくさんの方が今回の新潟に入りましたし、ハビー

の時でさえ1,000人を超える方が一次対応として行きました。その人たちのレベルがどうのこうのと、いろいろありますが、かなり慣れてきている。組織作りに慣れてきていると思います。一般的に言って二次対応するのは誰かということになると、これはまた地域へ戻ると思うんですね。先ほどおっしゃったようにガイドヘルパーの方とかホームヘルパーの方とかが、そういったところへ戻ると思うんですけど、じゃ視覚障害の方が100人いらっしゃるって、その中でホームヘルパーあるいはガイドヘルパーを利用されている方がいったいどれくらいいるかというと、今現在では、おそらく使用頻度はかなり低いのではないかと思います。視覚障害の方は高齢の方が多いので、そういったことでホームヘルプサービスを受けていらっしゃる方がいると思うんですけども、ややもすると家族がいらっしゃるって、そういうサービスは受けずに自分たちの力だけでやってしまう。

こういう言い方はおかしいかもしれませんが、なるべくなら、あまり他の世話になりたくない、というようなことを考えておられる方が多いんじゃないかと思うんですね。以前に比べれば行政サービスをうけられる方は増えてはいると思うんですけど、まだまだごく一部というふうな気がします。専門家としてどうするのと言われると、ハビーの時作った名簿は1,900名くらいだったと思います。そのとき阪神間にどれくらいの視覚障害者がいらっしゃるかといったら、われわれが持っているデータでは8,000人はいるだろうと言っていたんですね。ですから殆どの方はどこでどういうふうになっているのかわからないというのが正直なところで、われわれのところでもそういった方がほとんどみえていない。では専門家は防災についていろいろトレーニングを行ったり、横の連絡を密にして、何かをやっているかといえば、全くやっていない。視覚障害者福祉協会の方で、今回支援のために新潟に行きましょうということで入ったのですが、そのあと、例えば日本盲人社会福祉施設協議会がありますが、そこに働きかけたときに、今回の震災についてどんな対応をしますか、あるいは対応を協議されていますかと聞いたならば、今回はしていないというのがそのときの話で。やはり日ごろから、視覚障害に関連する人間たちも、防災設備の意識、あるいは特別支援をしなければいかんという、早めの立ち上がり方が重要だろうと。それが課題と言えば課題でしょう。

[震災時に盲導犬は、どうすればよいか]

(新阜) 盲導犬を預けた話が片倉さんから出ましたが、震災の時、盲導犬はしっかりと施設に預けたほうがいいですか。人によりますか？

(中村) 私の記憶では、今回新潟のほうで、一時的にせよ盲導犬と

一緒に避難所に避難したという方は5人くらいいらっしやって、少し長めにいらっしやった方が1人です。この間新聞にも出ていたと思うんですが、被害そのものが盲導犬の場合には少なかったということもありますし、すぐ親戚の方のところへ行ったとか、そういう情報があつたので、避難所、施設に預ける必要があるかという、それはそうじゃないのかなと思います。ただそれは都市部の場合とそれから地方の場合では若干違うし、先ほど言おうかなと思ったんですが、私は新潟に入った時、小千谷（市）、十日町（市）を通過してなんとかというところに抜けたんです。そこで、非常に立派な、公共のホテルみたいな施設ががらんどいて空いていてね。だからさっとそういうところへ行くのもいいのかなと。盲導犬の答えになっているかどうか分かりませんが。

〔自然災害に対する先人の知恵～家のカサ上げなどの備えをするとして〕

（新阜） 浮田さん。先ほど視覚障害者だけでなく、ボランティアとして高齢者にも関わっておられて、避難所というのは、全員が必ず避難するものじゃないと、拒否されている方が高齢者の中にも結構あると言われました。先ほど松永さんから、新潟で震災の前に7月から台風による水害があつて、高齢者の方がたくさん亡くなられたと言われました。このように高齢者や障害者の方が災害に巻き込まれ亡くなるケースが多いじゃないですか。それに対する浮田さんのお考えがありますか。

（浮田） 個人的な考え方というより、神戸市でよく言われているのが、和歌山のほうで地震が来た時に神戸は津波が来るので、地震と同時に津波対策がよく言われているんです。東灘区に本庄町という地域があるんですけど、そこで津波に対する住民の協議会が立ち上がっているそうです。本庄町の住民の中で古い方のお話を聞きましたら、その地域はたびたび水害にあつて経験があるから、たいがいの古いことを知っているお宅はかさ上げして家を作っているんやあと。ところが最近できた家は、そういうことを知らない人がたくさんいるからそのまま平地に家を造っている、もしくは地下にも部屋を造っているという方があるということを知りまして、昔から言われていたという知恵というのでしょうか、そういうものを新しく来ている人がちゃんと継承していかねばならないと感じました。それから、私の友人で世田谷区に住んでいる人がいるんですけど、世田谷区の三宿という地域は同じように川があつて、若干土地が低いんです。ここもよく水害が起こるそうなんですけれど、私の友人のところも非常に古い家で、建て直した時にはかさ上げをして作ったそうです。

今回、台風がありましたね。東京方面も。三宿は浸かつて

しまったそうなんです。彼の家とか昔からいる人は水害にあっていない、新しく家を作られたところは水害にあっている、ようなことを聞きまして、いろんな災害はあるかと思うんですけれど、特に水害の場合は、昔から水がつかるところやったら少しかさ上げして作っとけば大丈夫ちゃうかなーとか、昔からの知恵みたいなんがあって、どうしたら継承していけるのかなという気がしておるのですが。

[災害時の人的支援のあり方～

コミュニティの支援ネットワークと専門家の関り]

(新阜) 先ほど久保さんのお話でも、障害で分けるんじゃないくて、総合的に対応していかなあかんという話もでていましたね。川越さん、ハードの面で、社会の基盤整備の必要性はすごく分かるんですけど、今度はソフト面のこと、ハビーという視覚障害者の緊急支援組織を作られましたが、もし東南海地震とか起きた時、そういう組織の必要性を感じますか。

(川越) それは本当に必要だと思います。コミュニティ社会で、例えば神戸市で視力障害者福祉協会の単位がですね、自分たちの組織プラス、コミュニティの神戸市内のボランティアの方々とネットを組んで、さらに広域のネットを絡めると。それで私は地域の人たちが、日常的にボランティアの仕組みを勉強するシステムを、日常的に活動していく必要があると思います。例えばハビーでも、先ほどの繰り返しになりますが、正直言ってボランティアの教育管理には疲れ果てたというのが実感ですね。対応が悪いといって泣き出す女性もいましたしね。何を教育するかと言えば、視覚障害というのはどういう障害なのか、いうようなことを日常の中で分かってもらう必要があるわけですね。そういったコミュニティにおけるネットワークの形成と、今度はリーダー的な専門家というのはコミュニティにどう影響し、波及していくか。広域的な支援ネットワークの構築というものが必要なんです。

ただこれはどんなにボランティアがたくさん集まっても、やはり視覚障害のことが本当によく分かっている専門家集団がないとだめなんですね。少数でもいいから必要なんです。遅くとも1週間後くらいには、そういう専門家に入ってもらいたいですね。神戸の場合もね、避難所でラジオを2つも3つも渡すんです。障害者の場合、いつもいつも誰かにお手洗いについて行ってもらうのは言いにくいじゃないですか。だからものを頼むときにあげなさいよと。仮に持っているのがわかっていても、人というのはものをやったりする行為自体に悪い感じはしない。そういうふうにして渡しているんです。はじめのうちは、みな茫然としている、疲れきって、そんなら置いていってよって。物欲がないんですね。その恐怖感とか絶望感のあと、数日すると連絡が入ってきたり問い合わせ

があったり、これは重要な意味があるのです。もう一度やり直そう、もう一度生きる努力をしようという意思が芽生えているのです。大きな変化が起こっているわけですね、その被災者の中では。専門家は、そこを見逃してはいけません。じゃ仕事はどうする、家がつぶれたね、生活はどこでどうするとか、そういう相談にのってあげたりする、専門家がよほどしっかりとやっていかないと社会復帰の観点、職業的な自立というのですか、そういったところになかなか結びつかないと思います。だから長期戦で専門家がやらなければいけないと思います。

[専門家集団の支援体制や関り方]

(新阜) そういう点での経験は中村さん。実際ハビーや新潟へ行かれたり、リハビリテーション協会で活動されてたりすると、そういうことはどう思われますか。先ほど災害発生から2週間は避難所にいることを覚悟しなさいと言ってたけど、専門家集団の支援体制はどう考えますか？

(中村) どこからどこまでが専門家なのかよく分からないのですが、視覚障害のことに対してある程度の知識を持っている人たちがその場所へ行って、相談支援するということは重要だと思います。2週間我慢しろとは言わないんですけど、2週間ぐらい覚悟しろ、我慢でなくて覚悟です。誰も来ないということを経験に考えたならば、覚悟しておいたほうがよいでしょう。今回の新潟の場合もそうですが、行って何もしなければ何にも無いでいいんだと思うんですよね。今はそういう支援は必要ないよと言えればそれでよい。ただ支援が必要だというふうになったときに、コーディネーターがいるということがすごく重要なんじゃないかと思うんです。あと、私を専門家といわれるとちょっと恐縮するのですが、例えば歩行を教えてくれる人がいますよね。避難所から仮設住宅へ転居する。あるいは元あったところを建て直すので一時的にアパートに避難する。じゃその時に周辺の買い物とかをどうするのとなったときに、常に買い物ヘルパーが来てくれるとかそういうわけじゃないので、そういう時に人を頼みたいとか、そういうふうなことは基本的に考えないといけないことがあるのです。

新潟の場合にも今の計画では5月の連休あたりに専門家の人たちに呼びかけて、もしそういうニーズがあれば行って周辺の地域を知ってもらおうとか、そういうことはやろうと思っています。阪神大震災のときにも1月に起こった震災後、5月にそういう活動が、10数名のお手伝いをマスターしたものでやったんですね。歩行訓練です。それと同時に相談を受けるとか、こういうふうにしたらいじゃないかとアドバイスをする活動をしました。

[被災者への専門的サポートや相談援助のあり方]

(新阜) 千山荘でも総合的な相談会をやりましたね。近藤さん、そういうふうな実際に専門家に相談したい時、どこに連絡したらいいのかと言うた時に、川越さんが言われているボランティアの人にもリーダー的な人がいる、コーディネーター的立場の人にも中村さんから必要だといわれていますけど、当事者団体を調査してそういう点での働きかけというのはないですか。

(近藤) 阪神大震災に対しては、団体からの働きかけというのは、そこまでの余裕がなかったんじゃないかなと思います。けれどもハビーさんからお電話をいただいたり、それから千山荘の方から電話をいただいて、避難される方を受け入れますよということ、私は直接電話で、もう地震の3~4日くらいの間に2箇所からお聞きました。これはやはり非常に心強いことで、本当は最初に、ハビーや千山荘に私たちの団体がこのように力付けられたというお礼を言わなければいけなかったんだなと反省をしています。こういう形で、視力障害者が安心して避難できる場所、それからまた安心してお手伝いなり、あるいは物品のこと買い物のことと、どんなことでもお願いができるボランティア団体が、幸い阪神大震災の時は比較的早くあったということは大きな喜びだったと思っています。今後はこれを私たちの団体の方から発信していけるような方向で進めていかないといけないなと思っています。

[消防の使命と支援ネットワーク]

(新阜) 浮田さん。消防では、障害者、高齢者がどこにいるかというのは把握されていませんよね。これはプライバシーとかいうような問題があるから無理なことは分かるんですけど、震災とか大規模災害になった時、高齢者、障害者を救命した後の問題というのはどうでしょうか。日ごろからこういうものは防災的に大切なものと思いますがどうでしょうか。

(浮田) 被災直後とそれから長期的に考えていかなあかん面といういろいろあると思うんですね。消防職員として考えるならば、被災直後にいかに人命を救助するのか、いかに火災を鎮火させていくのかが一番大事なことで、やっぱり消防職員として考えたらいち早く被災をしていない消防署からどんどん消防車や職員がきて救助していく、われわれも応援してくれていることが大事な事だと思いますし、阪神大震災をきっかけにいろいろな救助組織やとかそれから消防応援協定とか、わりと消防の団体としてはすぐに被災地へ団体で入る体制はできていると思います。

消防ではないんですけど、ありがたかった応援に、福岡ふれあいの会というのがあったんです。それは長期的な話のことなんですけれども、被災直後はいろんな外からの応援が必要なんです、被災から1月経ち、2月経ってくれば、やっぱり被災地の団体が立ち上がっていかないかんし、がんばっていかないかんと思うんです。外からの応援というのは、そういう被災地でなされている団体をサポートしてくれるというような体制が必要で、いつまでも外部から入ってきた人間がどんどんやっているじゃなくて、被災地でもいろいろなボランティアがあったり団体があるのですから、団体をサポートする体制が嬉しいと思います。

KOBÉふれあいの会の場合は、たまたま私が北海道の旭川の人間と知り合いがありまして、旭川市民ボランティア連絡協議会というところが被災直後からすぐに10年間応援しようと、毎年人的支援をしてくれましたし、毎年KOBÉふれあいの会を助けてあげようとバザーというのを旭川市で行ってくれている。今年でちょうど10年経ってしまったのでこれでお終いといわれてるんですが、それは非常にありがたいのです。10年間ずっと続けてくれましたから。私も2回ほど旭川へ行ってバザーのこと聞きましたけれど、非常に嬉しかったです。被災地でがんばっている、それを応援してあげようというその姿勢が非常に嬉しかったです。

ですからそういう長期的なことになればもちろん当事者団体もそうでしょうけれども、被災してがんばっておるボランティア団体とか、福祉団体を応援する姿勢を、体制をどうして作っていくのかということが、これから必要になってくると思います。

[当事者組織間の救援体制づくりについて]

(新阜) なるほどね。まあ、いろいろな視点から、短期、中期、長期的な支援という体制ですね。それで組織間同士の助け合いが大切といえます。近藤さん、日盲連（日本盲人会連合）との障害者団体と、そういう協力関係について震災以降話し合われましたですか。中越の関係とかについていかがでしょうか。

(近藤) 日盲連としましては私たちの所属する上部団体ですし、こういうふうな災害は毎年どこかで起こったりしているものですから、そのつど話し合われています。ハビーさんも日盲連を通して、私たちの活動にボランティアとして参加して下さったわけですから、そういう話は伺っています。それから、香川県の視覚障害者福祉協会が台風で被害を受け、引越しをしていくという時に、それが全部水に浸かってしまったというような非常に大きな災害をうけられているというニュースも入っておりますし、日盲連との関係は持っていますけ

れど、他団体との関係はあまり強くはありません。

[大規模災害における組織間協力のための課題]

(新阜) 中村さん。こういうような組織間の連携や提携が言われていますね。中村さん、やはり壁は高いですか。

(中村) 高いですね。私はリハビリの方の立場の人間ですので、私が所属している団体というのは日盲社協、日本盲人社会福祉施設協議会という団体ですね。川越さんがお話の中でおっしゃっていた、ハビーに行くなら辞めてからにしてくれと言われた職員が実際にいるんですね。東京から来た人間が、当時けんかしてきたと言っていました。日ごろからそういう連絡ができていれば、支援体制というのはすぐ取れると思うのです。こういう災害の時にはこうする、こういうケースではこうするというふうに、水害にしても地震にしても、災害は段階や被災状況によって支援体制や支援の役割分担を考えていくことが必要ですね。

私は今、横浜に勤めているのですが、神奈川・東京というのは絶対地震が起こるだろうという地域なのです。起こった時にどうするのか。たぶん、われわれの施設は避難所になると思います。東京都内の施設もほぼ避難所になるだろうと。そういった場合に、自分の所に避難されている方の支援に精一杯になって支援する組織を作るなんてありえないと思います。先ほど消防の方もおっしゃっていましたが、外からの支援が絶対必要だと思います。行くか行かないかについて、またそこですったもんだやるのはあほらしいというか、それを事前に連絡会といったものをきちっと作っておいて、レベルに分けて対応さすというか、日盲社協だけでなく日盲連とかいったところで一緒になってそういうものを作っていくというのが重要だと思います。

[パネルディスカッションの総括]

(新阜) 行政の人の肩を持つわけやないけれど、行政の人も被災してたわけやからね。サポートを仕事でやっている人も皆被災していて、その中でまたがんばっていかうということだったんだから苦しかったんですね。川越さん、そろそろまとめに入りたいんですが、いかがでしょうか。私たちがこれから活かしていくことをお話し下さい。ちょっと会場から質問も受けたいと思いますが、川越さん、パネルディスカッションを締めていただけますか。

(川越) あまりにも時間が短いので話し足りないんですが、やっぱりセルフディフェンスで、自分たちで自分たちを守ろうと思うなら、やっぱり社会を認識しなければ、自分たちだけヘル

メットをがんばってかぶってても無理なんだという事実を理解すること。災害の問題というのは、やはり多角的に、いろんな角度を変えてグッズ展を開いたり、シンポジウムをしたり、部分的に検討し問題点に光を当てながら、繰り返しやっていかないとね。自分たちの生命および財産を失う問題ですから、認識を明確にしてイメージーションをできるような考え方を持つこと、それが大事だろうと思います。それとですね、視覚障害者の方がいっぱいいらっしゃるんで敢えて申し上げますが、やはり近藤さんを中心に、この神戸市にいれば、行政とか専門家、盲導犬の中村透さんもお見えですし、私のJBS等々も、そういう視覚障害福祉で飯を食ってる連中は遠慮することなく発言していく必要があるんじゃないかと。日常的に視覚障害者に対して関わっている人からがんばらなければ、善意だとかボランティアだけでは絶対解決できないこと。それからそのネットワーク作りも日盲連に相談しても日盲社協に相談しても時間がかかると思います。誰も活用、利用しないんですよ。リスクはあっても、はっきり言ってお金にならないのですから。

ですから、よほど気持ちの強い人たちが何人かで、いくら小さくてもとりあえずスタートさせて、時間をかけて被災者組織にしていけることが重要かと。これ兵庫県の悪口になるかも分かりませんが、一つだけお伝えしておかねばならないことがあります。今年の1月、去年の暮れから今年の1月にかけて北海道と宮城県と兵庫県の3つの行政地域に対してアンケート調査を行いました。その中に災害対策マニュアルはありますかという基本的な質問があり、誠に遺憾なことですが、あれっという結果が出ています。北海道にある区域は80パーセント以上がマニュアルを整備しています。しかし、なぜか兵庫県は63パーセントで一番低い。だから行政は発災直後は役に立たない。これは認めるとして、10年経ったいま、なぜこの数値かと、これは一言いいたいし、やっぱり一人一人が社会と行政をよく見ていく必要があるなど。このままいったらまた同じ経験せざるを得ないと思います。

(新阜) ありがとうございました。川越さんは市町村レベルで防災計画が立てられていないことを言われているんですね。いろいろお話を聞き、会場の皆さんから質問を受けようと思ったのですが、時間がもうありません。皆さんもこのままだったら不満だと思いますので、神戸アイライト協会のホームページに質問をお寄せください。書き込んでください。その時、必ずパネリストの方おひとりおひとりに指名で書いていただき、インターネットをされていない方は、このあと受付で質問を紙に書いていただいたら結構です。また後日回答させていただきます。

皆さん、このような震災のメモリアルイベントは10年だから、一区切りだから、もうこれで終わりだということじゃな

いんです。神戸アイライト協会ではまた引き続き違う形でこういう防災のイベントを、継続してやっていくつもりです。今日は新潟の松永さんにも飛び入りの発言をいただきました。いろんな話を新潟の皆さんに伝えていっていただきたいと思います。また皆さんと交流できることを楽しみにしています。また会いたいと思います。入口に新潟の視覚障害者の皆さんへの義援金の支援カンパをしていますのでご寄付をお願いいたします。

[目次に戻る](#)

「視覚障害被災者の10年」（阪神・淡路大震災メモリアルイベントの記録）

あとかき

未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災から10年を目前に控えた平成16年12月4日、震災メモリアルイベント『視覚障害被災者の10年』を神戸で開催いたしました。当日は大変寒い中にも拘わらず、中央区の中華会館東亜ホールには、当時被災された視覚障害者をはじめ、救援活動に従事されたボランティアや関係団体の方々が会場いっぱいに詰めかけてくださいました。

この集いでは、被災された視覚障害者の方々の本当に生々しい体験を聞くことができました。また、大混乱の中で視覚障害被災者支援対策本部（ハビー）を立ち上げ、厳寒の中で視覚障害者の救援活動に従事された川越氏の基調講演、「視覚障害被災者1000人アンケート」に取り組まれた神戸視力障害センターの久保氏による基調報告、そして「語り継ごう、震災体験」をテーマに熱く語られたパネルディスカッション。改めて、地震の恐ろしさと肉親を失った悲しみ、困難を極めた救援活動の様子が語られるとともに、貴重な教訓や数々の提言が明らかにされました。

この集いを企画・開催した私どもNPO法人神戸アイライト協会の理事会では、「このイベントの内容は、きちんと文字化して後世に残すべき」との決議により、編集委員を選任して出版物の編集に取りかかった次第です。本書を世に送り出すことができましたのは、本当に多くの方々のご協力の賜物であります。当日の録画ビデオテープからのテープ起こしデータを提供して下さった石川さん、お忙しい中、原稿の校正を快くお引き受けいただいた出演者の皆さん、さらに出版を快くお引き受けいただき、我々を叱咤激励して下さった市橋正光さんをはじめ株式会社『大活字』の皆さん、また、点訳で全面的に協力していただいた点訳ボランティアグループ連絡会の皆さん、それから他にも多くの皆さんに写真提供、ソフト提供、その他いろいろなところで多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げる次第です。

本書が、これからも起こるであろう地震をはじめとする自然災害に対して、視覚障害者のセルフディフェンスや救援活動、復興支援のあり方に一石を投じるものとして、多くの視覚障害者の皆さんや関連団体、ボランティアの皆さん、また行政関係各位にお目通しいただけますよう、心より願いたします。

平成17年9月

編集委員 小林 良守(こばやし よしもり)

目次に戻る